

平城京左京三条二坊三坪 発掘調査報告



奈良国立文化財研究所

序

古都奈良に押しよせる開発の波は最近その激しさをさらに増しており、豊かな文化財に恵まれた奈良の景観の変貌とともに、土地に刻まれた歴史も急速に失われようとしている。こうした状況のもとで、平城京内の発掘調査件数もうなぎ昇りに増加し、奈良国立文化財研究所もその調査研究に追われる現状の中にある。

このたび株式会社東鮓のレストラン新築にともない、同社の協力を得て当研究所が事前に発掘調査を行うはこびとなった。今回発掘調査した近鉄新大宮駅周辺は、新市街地として特に開発の進行している地域であり、近年の発掘調査によって平城京時代の様相も次第に明らかにされつつある一画である。調査地の東に隣接する特別史跡宮跡庭園をあげるまでもなく、平城京左京三条二坊にあたるこの地は、奈良時代において離宮や高級貴族の邸宅が建ち並ぶ一等地であったのである。

調査の成果は本書に記述してあるとおりで、坪全体の中に整然と配置された建物や塀の検出、地鎮の壺の出土など、左京三条二坊における邸宅のあり方についてさらに知見を豊富にすることができた。今後の周辺地域における調査の進展を得て、古代平城京の様相がより具体的に明らかになることを望む次第である。

1984年6月

奈良国立文化財研究所長

坪井清足

目 次

I 序 章

調査の経過と概要.....	1
---------------	---

II 遺 構

1. 遺跡の概観.....	3
2. 遺構.....	6

III 遺 物

1. 土器.....	10
2. 瓦 塚.....	13
3. 銭貨・木製品.....	14
4. 建築部材.....	15

IV 考 察

1. 条坊と遺構の占地.....	16
2. 遺構の時期区分.....	18
3. 京内の宅地割と坪内区画施設.....	20
4. 平城京における地鎮.....	21
5. 結語.....	22

図版

表 紙 調査地と平城宮遠景	PL. 6 建物(S B 2980・S B 2990)
図版扉 平城京と調査地遠景	PL. 7 塚(S A 2960・S A 2985
PL. 1 調査地周辺空中写真(1962年撮影)	・ S A 2970)
PL. 2 調査地周辺空中写真(1984年撮影)	PL. 8 井戸(S E 2965・S E 2988)
PL. 3 調査区全景	PL. 9 柱根
PL. 4 調査区全景	PL. 10 地鎮壺・建築部材・木製品
PL. 5 調査区西半部の遺構・建物(S B 2950)	PL. 11 土器
卷末折込1 平城京左京三条二坊三坪遺構空中写真(1/200)	
卷末折込2 平城京左京三条二坊三坪遺構実測図(1/200)	

挿図

	頁
fig. 1 平城京と調査地位置図	1
fig. 2 調査地周辺地形図	1
fig. 3 発掘調査風景	2
fig. 4 平城京(復原)と調査地	3
fig. 5 宮跡庭園の遺構	3
fig. 6 平城京左京三条二坊の発掘調査図	4
fig. 7 左京三条二坊十五坪の邸宅(復原)	5
fig. 8 遺構配置図	7
fig. 9 S B 2990柱根出土状況実測図	8
fig.10 調査区西壁南部土層図	8
fig.11 井戸 S E 2965・S E 2988立面実測図	9
fig.12 S X 2982実測図	9
fig.13 S E 2988・S E 2965・ S K 2968出土土器実測図	10
fig.14 包含層出土土器実測図	11
fig.15 S X 2982・井戸 2・ S K 2847出土土器実測図	12
fig.16 出土軒瓦拓影(1/4)	13
fig.17 出土木製品実測図	14
fig.18 柱根・礎板実測図	15
fig.19 三坪の占地概念図	17
fig.20 遺構の時期変遷図	19

表

	頁
tab. 1 調査日程	2
tab. 2 平城京左京三条二坊の発掘成果一覧	4
tab. 3 条坊関係の計測座標値	17
tab. 4 平城京の宅地割と坪内区画施設	20
tab. 5 平城京における鎮物埋納例	21

例　　言

1. 本書は奈良市三条大路一丁目 594 ほかに位置する平城京左京三条二坊三坪の発掘調査報告である。
2. 調査は株式会社東鮎（奈良市芝辻町 4 丁目 172 代表取締役 片山芳幸氏）のレストラン新築工事にともなう事前調査として、奈良県教育委員会の委託を受けた奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部（部長 岡田英男）が実施した。
3. 調査は平城宮跡発掘調査部の平城宮跡第 151—32 次調査に該当し、調査期間は 1984 年 2 月 27 日から 3 月 27 日まで、調査面積は 940m² である。
4. 調査には田中哲雄・山本忠尚・西 弘海・松村恵司・山岸常人・佐藤 信・館野和己が参加した。調査にあたっては株式会社東鮎、設計担当のオーム建築設計事務所（大阪市東区南本町 5-10 ナカノビル）および奈良県教育委員会事務局の協力を得た。また報告編集に際し奈良市教育委員会の協力を得た。
5. 本書の作成は、平城宮跡発掘調査部長岡田英男の指導のもとに調査員全員があたり、全体の討議を経て次のように分担執筆した。
I・II・IV-3・5：佐藤 信、III-1・IV-2：西 弘海、III-2：山本忠尚、
III-3・IV-4：松村恵司、III-4：山岸常人、IV-1：田中哲雄
6. 遺構・遺物・図版の写真は佃 幹雄が担当し、八幡扶桑・杉本和樹の協力を得た。
7. 本書の編集は佐藤 信が担当した。

I 序 章

調査の経過と概要

この報告は、平城京左京三条二坊三坪にあたる奈良市三条大路一丁目594ほか(旧奈良市尼ヶ辻コドサ)のレストラン新築予定地において、奈良国立文化財研究所が行った発掘調査にかかるものである。調査は奈良県教育委員会の指導のもとに各方面の協議の末、原因者負担で実施されるはこびとなり、開発行為者の株式会社東鮎の協力を得て、県教育委員会の委託を受けた奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が実施した。

調査地は国道24号線バイパス(高架)の東に接し、国道368号線(大宮通)にも近く、近年とくに市街地化の傾向の激しい近鉄新大宮駅周辺の地域に位置する。試みに1962年と1984年の調査地周辺の空中写真(PL. 1・2)を比較すれば、急速な開発の足跡は歴然としている。

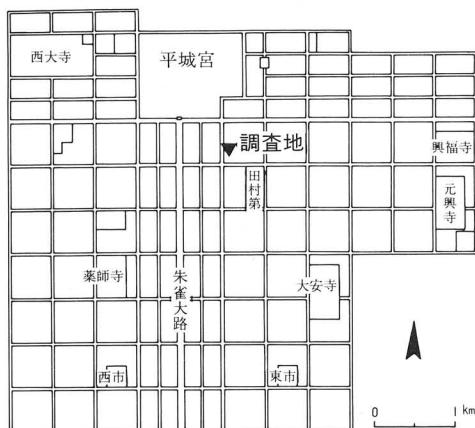


fig. 1 平城京と調査地位置図

しかし、当地は奈良時代の園池として著名な特別史跡平城京左京三条二坊宮跡庭園 (fig. 5) が東隣りに存在することによって知られるように、奈良時代においても平城宮に近い京内の一等地であり (fig. 1)、貴重な遺構の存在が推測された。

調査地は東西に細長い三枚の水田として残されており、うち一番北の一枚のみ駐車場用に盛土されていた。この敷地 ($2,813\text{m}^2$) のうち東南方の建物予定部分 (857m^2) にできるだけ重ね、さらに左京三条二坊三坪の

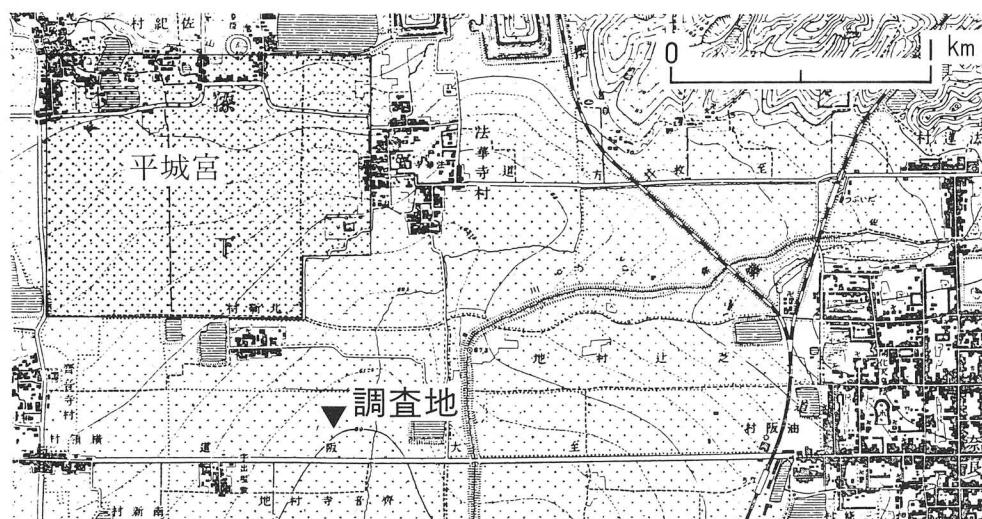


fig. 2 調査地周辺地形図(明治18年測量、同31年発行、仮製二万分一地形図)

東西中軸線付近を北に延長したL字形に発掘調査区を設定した。調査地が三坪の内側にあって条坊関係の遺構がかからないため、坪中心部の様相を明らかにしようとしたのである。調査面積は補足調査による拡張部をあわせて940m²となった。

発掘調査にあたっては、奈良国立文化財研究所が行っている平城京条坊の地区割りにしたがって調査区を6AFI-P区と定めた。さらに宮跡庭園の調査時の基準にあわせて、国土方眼座標(第6座標系)の基準点(X=-146,369.607、Y=-17,977.621)をP I 70として3m方眼の小地区を設定し、発掘遺構と遺物の記録用の地区名とした。

調査は1984年2月27日から3月27日までの1ヶ月の期間、tab. 1の工程で行った。今調査では検出した遺構の状況や調査期間にかんがみて、細部をのぞく実測調査を写真測量によって調査の迅速化を図ることとした。予め正確な標定点を遺跡に設置し、ヘリコプターを利用した空中写真撮影を行い、そして写真測量による図化の成果として精度にムラのない1/50・1/100の大縮尺の実測図を得ることができた。なお関係者の協議の結果、検出遺構の全面的な埋戻しは行わず、遺構面に真砂を厚く敷き養生をはかけて調査を終了した。

遺構を検出した面は、現地表下30~50cmの地山面(暗灰褐色粘土・黄褐色粘土)であり、部分的に後世の削平を受けていたものの、遺構の保存状態は極めて良好であった。

検出した主要な遺構は、奈良時代の掘立柱建物8棟、掘立柱塀4条・井戸2基・土壙4基などである。その結果、奈良時代を通じて5期にわたる平城京左京三条二坊三坪の敷地利用状況を明らかにすることができた。中でも奈良時代前半から中頃にかけて三坪は坪全体を占める宅地であったこと、その奈良時代中頃の宅地に坪内を½に区画する塀や整然と配置された建物群を検出したこと、そして和同開珎2枚を納めた地鎮用と思われる須恵器壺の検出、などの新知見を得ることができた。



fig. 3 発掘調査風景

1984. 2. 27 現地協議及び調査区設定

バックホーによる表土排除

3. 5 機材搬入

3. 6 遺構検出開始

3. 7 基準点測量、地区杭設定

3. 13 地鎮の壺出土

3. 21 遺構検出終了

空中写真撮影用の標定点設定

3. 22 空中写真撮影、地上写真撮影

3. 23 地上写真撮影、井戸等補足調査

3. 24 井戸等補足調査の実測

3. 27 土層図作成、遺構養生(砂入れ)

機材撤収

tab. 1 調査日程

II 遺構

1. 遺跡の概観

平城京左京三条二坊三坪の中央部やや東南にあたる今回の調査地は、平城京廃絶以降水田化し今日に至ったと考えられる地区で、現状は平坦な水田であり、地表面標高は60.2mを計る(ただし、北寄り3分の1に厚さ50cmの盛土がある)。地形的には、奈良盆地北の奈良山から平城宮の南にのびる丘陵のきわめてなだらかな東南傾斜面上に位置し、東方を平城京堀河の一つにあたる菰川こもが南流している(fig. 2)。

調査地の基本的な層位は、地表から①耕土(約20cm)、②床土(約10cm)、③遺物を包含する暗褐色粘質土(10cm前後)の順で、その下で④暗灰褐色粘土ないし黄褐色粘土の地山面となる。なお、地山の一部には遺物を含まない奈良時代以前の黄灰色砂層の旧河川がみられた。遺構の検出は地表下30~50cmの地山面において行った。柱掘形の深さなどの遺存状況からみて、一部後世の削平を受けているが、遺構の保存状態は極めて良好であった。

ところで、調査地の周辺は近年近鉄新大宮駅や国道368号線(大宮通)・国道24号線バイパス沿いを中心として急激に市街地化の波がおし寄せており、今や平城廃都以降水田として伝えられてきた土地も次第に消えつつある。一方、こうした開発に相応じてこの地域の発掘調査事例も数を増しており、左京三条二坊は平城京内において最も多くの発掘調査が行われた地区となっている。なかでも調査地東隣りの左京三条二坊六坪の特別史跡宮跡庭園は、見事な奈良時代の園池として著名である(fig. 5)。これまでの左京三条二坊の発掘調査の成果をまとめるとtab. 2・fig. 6の如くである。

1965年、奈良国立文化財研究所が平城宮東南隅において実施した平城宮跡第32次調査によって、二条大路と東一坊大路の交点とともに左京三条二坊一坪の北西端の様相が明らかとなった。1973・4年には奈良市庁舎建設の事前調査として十・十五坪を広範囲に調査(第83・86次)した。この調査では、八世紀末まで十五坪全体を占める邸宅を確認、東西に並ぶ



fig. 4 平城京(復原)と調査地



fig. 5 宮跡庭園の遺構

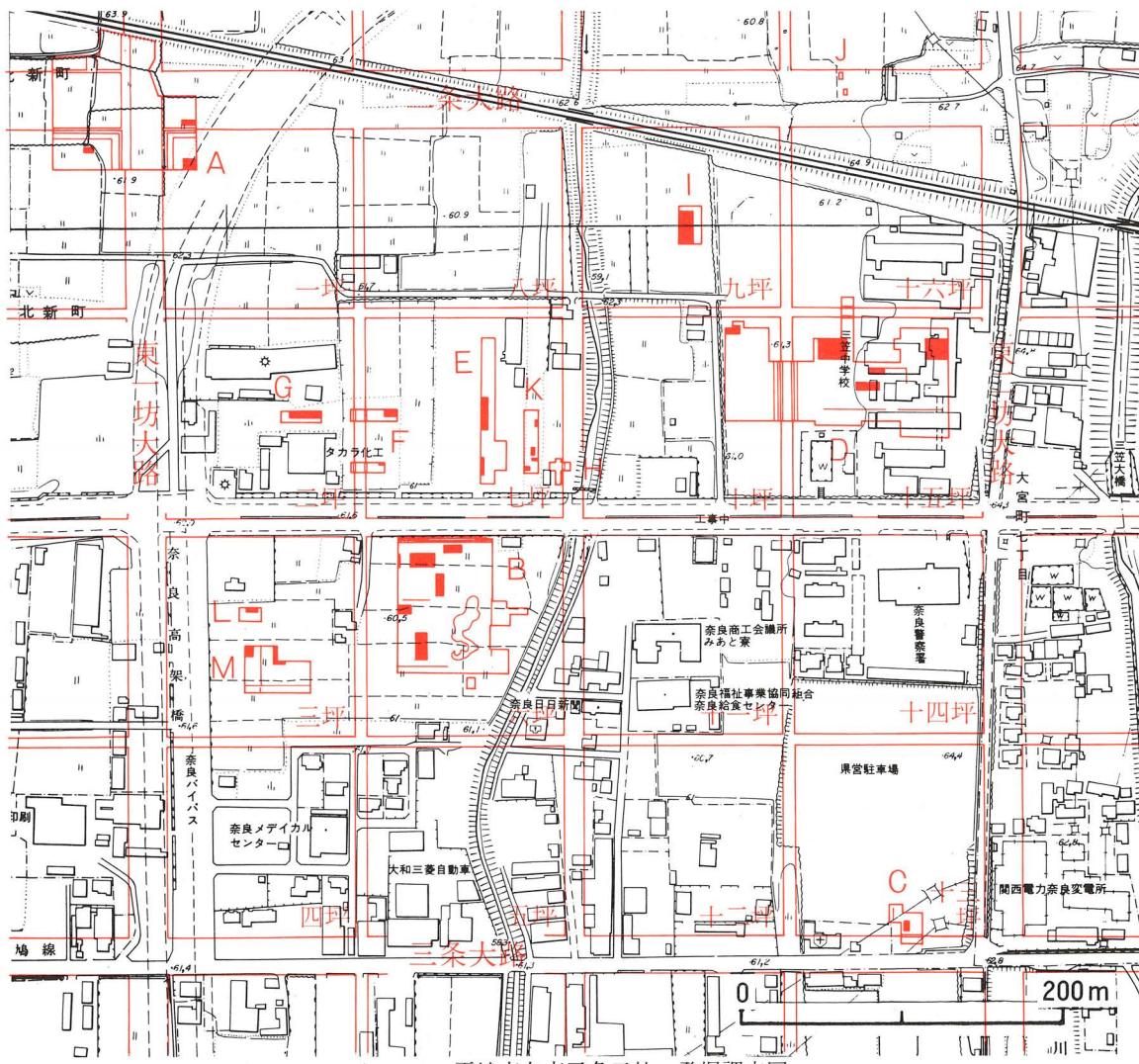


fig. 6 平城京左京三条二坊の発掘調査図

年 度	調査次 数	条坊位 置	面 積	奈 良 時 代 の 主 要 遺 構	文 獻
A	1965	第32次	一坪	6000m ² 坪西北隅の築地・溝・建物	『奈良国文化財研究所年報1966』1966年
B	1973・4	83・86	十五・十坪	6200 一坪を占める掘立柱建物群・坪内区画塙 ・坪境小路	奈文研『平城京左京三條二坊』1975
C	1974	奈良県	十三坪	300 三条大路北側溝・建物・塙	奈良県立橿原考古学研究所『平城京左京三條二坊十三坪』 1975
D	1975 1977 1979	96 109 121	六坪 六坪 六坪	4400 坪心の園池と掘立柱建物群・坪内区画塙 園池北の掘立柱建物群 園池への導水路・掘立柱建物	奈文研『平城京左京三條二坊六坪発掘調査概報』1976 奈文研『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』 1978 奈良市教育委員会『平城京左京三條二坊六坪発掘調査概報』1980
E	1977	103-1	七坪	900 掘立柱建物群・旧河川	奈文研『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』 1978
F	1978	112-3	七坪	301 坪境小路・掘立柱建物群	奈文研『昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』 1979
G	1979	118-15	二坪	150 掘立柱建物	奈文研『昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』 1980
H	1979	118-23	七坪	160 東二坊坊間路西側溝	同上
I	1979	奈良市	九坪	360 坪中心の大型掘立柱建物	奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書(昭和 54年度)』1980
J	1980	123-37	二条大路	18 二条大路路面か	
K	1982	141-35	七坪	342 小規模建物・六坪園池への導水路	奈文研『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』 1983
L	1983	奈良市	三坪	120 掘立柱建物	奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書(昭和 58年度)』1984
M	1983	151-32	三坪	940 坪内区画塙・掘立柱建物群	本報告

tab. 2 平城京左京三条二坊の発掘成果一覧

2棟の主屋建物とそれを囲む建物群・坪内を区画する塀、そして十・十五坪間の坪境小路などを検出した。1974年には奈良県立橿原考古学研究所が十三坪南辺を調査し、三条大路北側溝と坪内の建物を確認した。つづく1975年には奈良郵便局建設予定地として六坪の調査が行われ(第96次調査)、坪の中心に奈良時代の園池を検出、それをとり囲む建物群や塀が坪内に計画的に配置されていることが明らかとなった。特別史跡に指定して保存された宮跡庭園である(fig. 5)。この遺跡は、1町(以上)規模をもつ遺構や出土遺物から、平城宮と密接に関連した離宮的性格の施設ないし親王宮などかと考えられる。なお1977・79年には宮跡庭園の補足調査(第109・121次)が行われた。1977年には七坪のほぼ中央に南北トレンチを入れ(第103-1次調査)、建物群を検出した。翌1978年の第112-3次調査では二・七坪間の坪境小路等、1979年の第118-15次調査では二坪の建物をそれぞれ確認した。同年の奈良市による九坪の調査では、坪の中心に大規模な掘立柱建物が検出され、九坪が坪全体を占める宅地であったことが判明している。つづく1980年には十六坪北の小規模な調査(第123-37次)で二条大路の路面かと思われる面を確認、1982年の七坪の調査(第141-35次)では小規模な掘立柱建物群と六坪の園池への導水路を検出した。その後1983年に入って、奈良市は今回の調査地に北接する三坪内の水田を調査し、掘立柱建物等を検出している。

今回の調査(第151-32次)では、三坪の中央やや南寄りの地を 940 m²にわたり調査した。その結果、奈良時代前半に坪の東西 2 等分線をわたる建物が存在した時期、奈良時代中頃には南北塀・東西塀に区画されつつ掘立柱建物群を配置した時期のあることが判明した。両時期とも、三坪は東の六坪の宮跡庭園とは異なる敷地であり、すくなくとも 1 坪を占める宅地であったと推定できるのである。

以上みてきたように平城京左京三条二坊においては、一町規模以上を占める宅地として六坪(宮跡庭園)・九坪・十五坪に加えて今回の三坪を数えることができる。また七坪もある程度(1,700m²)調査が進んでいるが、坪内を細かく宅地割するような施設はまだ見つかっていない。平城京の発掘調査で知られた宅地割の遺構をみても、一町規模の宅地の例は限られており(tab. 4)これらの宅地は上級の官人に班給されたものと推定できる。このことは、平城宮の東南に接する立地とあわせて、左京三条二坊が平城京内でも一等地の高級邸宅街であったことを示している。しかも、今回調査の三坪は東一坊大路に面し、三条条間路にも面するという好地を占めており、京内宅地の一例として注目されるのである。



fig. 7 左京三条二坊十五坪の邸宅(復原)

2. 遺構 (fig. 8 ~ 12, PL. 3 ~ 9)

検出した主要な遺構は奈良時代に属する掘立柱建物 8 棟、掘立柱塙 4 条、井戸 2 基、土壙 4 基と、中世～近世の土壙 5 基などである。各遺構には奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部で行っている平城京左京の調査基準に従い一連の通し番号を付した。また遺構の種類を表わすため、遺構番号の前に S B 一建物、S A 一塙、S E 一井戸、S K 一土壙、S X 一特殊遺構等の記号をつけた。以下、遺構の種類毎、遺構番号順に解説する。

掘立柱建物

S B2950 (PL. 5) 調査区中央北辺に位置する掘立柱南北棟建物。一辺 1.5 m、深さ 0.8 ~ 1.0 m 程の大規模な矩形の柱掘形をもつ。桁行 4 間以上(3.0 m 等間)、梁間 3 間(2.4 m 等間)で、廂のない建物。柱はすべて抜き取られているが、西南隅の柱抜取穴には枘をもつ長さ 40 × 幅 15 × 厚さ 5 cm の板材(礎板か)が残存していた。なお抜取穴の方向は、西の側柱列では建物の外側に向かっているが、南妻柱列では一定していない。この S B2950 の西側柱筋と三坪を二等分する南北塙 S A2970との間は 7.1 m (0.295 ~ 0.296 m の天平尺で 24 尺) で、S B2950 の梁間総長と一致する。また西方の東西棟建物 S B2990 身舎と柱筋をそろえている。なお西側柱の部分で、S B2950 の柱掘形は S B2980・S B2998 の柱掘形を切っており、東南隅柱掘形は中世～近世の土壙 S K2955 によって切られている。

S B2975 調査区中央のやや西よりにある、桁行 3 間・梁間 2 間の小規模な掘立柱南北棟建物。柱間は桁行 1.8 m (6 尺)・梁間 1.5 m (5 尺) 等間。北の妻柱列と西側柱の一つの柱掘形のみに柱痕跡が確認できた。この建物は北の S B2978 と棟通りをそろえている。

S B2978 調査区北辺中央にある南北棟掘立柱建物。梁間は 2 間、桁行は推定 3 間で柱間は梁間が 2.25 m (7.5 尺) 等間、桁行が 2.1 m (7 尺) 等間。柱掘形の規模は一辺 0.5 m 程で小さく浅いため、桁行では妻部分の柱掘形しか確認できていない。南の妻柱の位置で S B2980 と S A2970 の柱掘形を切っている。また南の S B2975 と棟通りをそろえている。

S B2980 (PL. 6) 調査区北辺中央にある大規模な東西棟掘立柱建物。桁行 4 間以上・梁間 2 間以上で、南廂をもつ。柱間は桁行が 3.0 m (10 尺) 等間、梁間は 2.7 m (9 尺) 等間。柱掘形は 1 m × 1.2 m 程の大きさで、柱はすべて抜取られている。この柱掘形は西妻で S K2996 を切っているが、南の側柱・入側柱の部分で S B2950・S A2970・S B2978 の柱掘形によって切られている。なおこの建物は三坪の東西 2 等分線をまたいで建っている。

S B2990 (PL. 6) 調査区西北隅にある規模の大きな東西棟の掘立柱建物。梁間 2 間以上、桁行 2 間以上で、南廂をもっている。柱間は梁間が身舎部分 3.0 m (10 尺) 等間、廂の出が 2.4 m (8 尺) で、桁行は 2.7 m (9 尺)。身舎東南隅の柱以外の身舎部分すべての柱穴(柱穴④⑤⑥⑦ [fig. 8]) に径 30 cm 程の断面八角形の柱根が残っていた (fig. 9、III-4 参照)。特に東妻の棟通りの柱(柱穴④)は礎板として下段に南北方向、上段に東西方向の板材を重ねている。身舎の柱は東方の S B2950 と柱筋をそろえている。また、東妻柱列と S A2970 との間は 5.

9m(20尺)を計る。

S B2992 調査区西部中央にある小規模な南北棟掘立柱建物。梁間は2間だが、桁行は柱掘形が浅いため南側2間分しか確認できなかった。柱間は梁間が2.1m(7尺)等間、桁行が2.4m(8尺)等間。東側柱はS A2970の柱掘形を切っており、それより新しい。また西南隅の柱掘形からは奈良時代後半の須恵器杯B蓋が出土し、同時にS B2990の柱抜取穴から出土した須恵器壺の破片の一部も出土している。

S B2995 調査区東端北辺の建物で、東西方向の3個の柱掘形しか検出できなかったが、柱掘形の規模からみて西廂をもつ南北棟建物かと思われる。南妻の柱間は3.0m(10尺)等間で、身舎の柱にのみ柱痕跡がみられた。建物の方位は北で若干東にふれている。

S B2998 調査区北辺中央にある掘立柱建物。東西方向1間以上・南北方向2間以上の建物の、西南隅の部分を検出したにとどまる。柱間は東西方向が2.4m(8尺)、南北方向が2.7m(9尺)。このS B2998の柱掘形はS B2980およびS B2950の柱掘形によって切られており、今回の調査区では最も古い時期の掘立柱建物である。

掘立柱塙

S A2960(PL.7) 調査区南寄りにある掘立柱東西塙で、18間分を検出した。掘形は60cm×80cm前後で、径20cm前後の柱痕跡のみられるものが多い。柱間には2.25m(7.5尺)と2.1m(7尺)の両者がみられる。東端から7番目の掘形(柱穴④)には柱根と礎板、14番目の掘

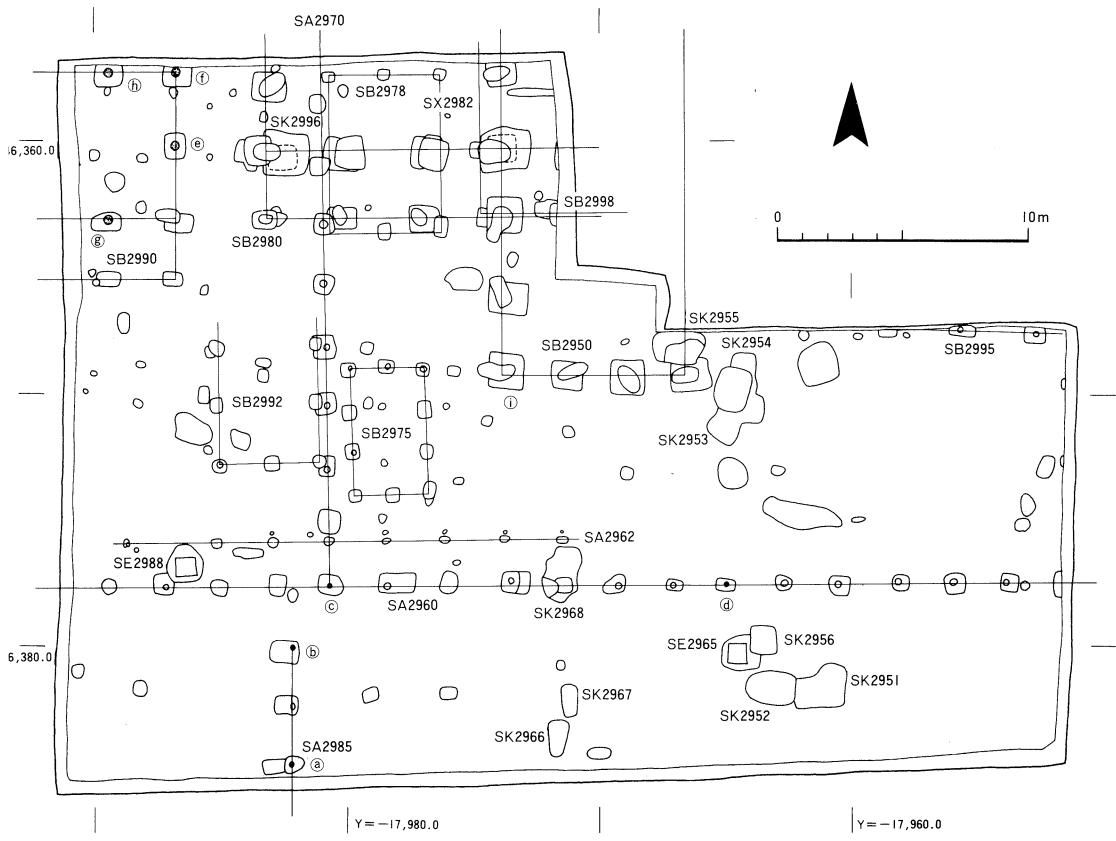


fig. 8 遺構配置図

形(柱穴⑦)には柱根が残っていた。後者の柱掘形は南北塙 S A 2970と接合する位置である。また、東端から4番目の柱掘形からは平城宮II期の軒丸瓦6225型式が出土した。S A 2960の柱筋は三坪の南北二等分線から南26.9m(88尺)の位置、三坪を南北に四等分する南ラインの北4.5m(15尺)の位置にある。なおこの柱掘形は、調査区西辺で井戸 S E 2988の掘形、調査区中央では土壙 S K 2968によって切られている。

S A 2962 S A 2960から北1.8m(6尺)の位置で平行に走る掘立柱東西塙。6間分を検出したが、さらに東西に延びる可能性がある。柱掘形は30cm×40cm程の小規模な橢円形で、すぐ北に接して控え柱の柱穴とみられる円形の小穴(径15cm)をともなっている。

S A 2970(PL. 7) 調査区中央西寄りで東西塙 S A 2960の北に直角にとりつく掘立柱南北塙。柱間2.4m(8尺)等間で8間分を検出した。掘形は80cm×90cm程で、埋土はS A 2960・S A 2985に似る。この塙の位置は三坪の敷地のちょうど東西2等分線上にのっている。なお、北で行われた奈良市の発掘調査で同線延長上にある柱掘形が確認されているが、三坪中心点から北40尺の位置でとまっており、それより北には延びない。

S A 2985(PL. 7) S A 2970よりも西に1.5m(5尺)寄った位置で、東西塙 S A 2960よりも南にある掘立柱南北塙。柱間は2.4m(8尺)等間で2間分を検出した。調査終了直前に調査区の南で建設工事用の掘り下げを行っている地点で北端から6番めの柱掘形を確認したので、S A 2985はさらに南に延びている。北端の柱と東西塙 S A 2960との間2.4m(8尺)は開口としている。掘形の規模・埋土はS A 2970・S A 2960と似ており、北と南の掘形には径約20cmの柱根と小さな礎板が残る(III-4参照)。

井戸

S E 2965(PL. 8、fig.11) 調査区東南部で検出した隅柱横桟縦板式の井戸。掘形は東西1.5m・南北1.3mの隅丸方形で、深さは中央部で遺構検出面から約1.7m。井戸枠は東西70cm

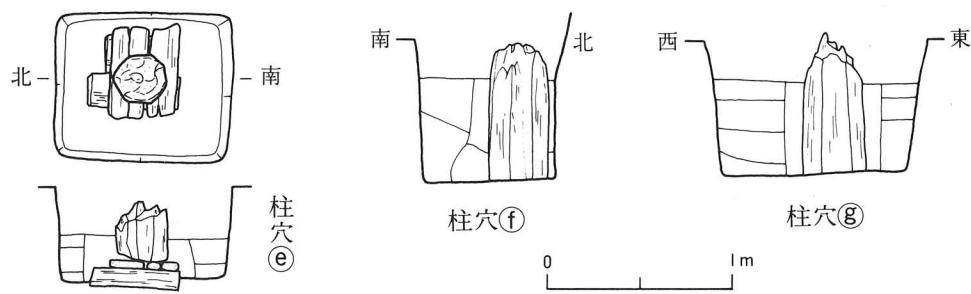


fig. 9 S B 2990柱根出土状況実測図

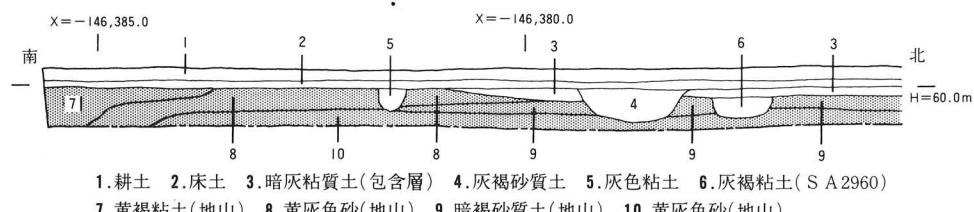


fig. 10 調査区西壁南部土層図

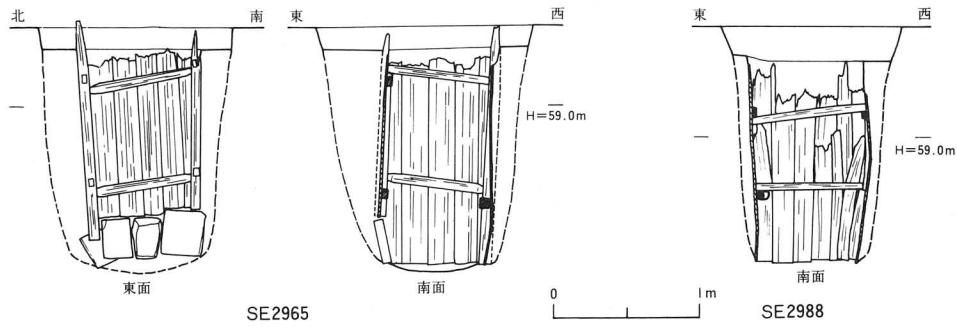


fig. 11 井戸 S E2965・S E2988立面実測図

・南北75cmで、四隅に角柱をたて、枠をもった横桟を渡して四辺の縦板を支える構造をもつ。東面の隅柱・縦板だけは、下段に完形の博3枚と方形の石1個を立て並べた上に据えている。縦板は下端から1.4m分、横桟は2段残存する。枠内埋土出土遺物には奈良時代末期の平城宮V(780年頃)の土器類や完形の平瓦、曲物底板などがある。

S E2988(PL. 8, fig.11) 調査区西南部で検出した井戸。掘形は東西1.2m・南北1.5mの不整長円形で、深さは中央で1.5mまで確認した。この掘形はS A2960の柱掘形を切っている。井戸枠は東西80cm・南北70cmの矩形で、縦板を内側から横桟によって支える構造をとる。縦板は下端から1.4m分、横桟は2段が残存する。埋土から奈良時代後半の平城宮III(750年頃)の土器と、鉢の付いた円形の木蓋などが出土地した。

土壙

S K2951～2955 調査区東半に散在する不整形の土壙群。互いに切り合うものもあるが、いずれも中世(室町時代頃)の土師器小皿や瓦質土器、陶器片を少量出土している。

S K2968 調査区中央の南部にある不整形の土壙。

S A2960の柱掘形を切っている。少量出土した土器は奈良時代後半(平城宮III以降)のもの。またS K2966・2967からも奈良時代の土器細片が出土している。

S K2996 調査区北辺西部にある隅丸方形の土壙。一辺約1.8mで、深さは遺構検出面から約1.6m。遺物はなく、井戸の掘形として掘られ、そのまま埋め戻されたものか。S B2980の柱掘形によって切られしており、調査区内では最も古い時期の遺構である。

その他

S X2982(PL.10, fig.12) 調査区北辺で検出した径18cmの円形の小土壙で、中に和同開珎2枚を納めた小形の須恵器壺を埋置したもの。おそらく地鎮のための施設であろう。壺の年代は奈良時代後半の平城宮III(750年頃)に相当する。

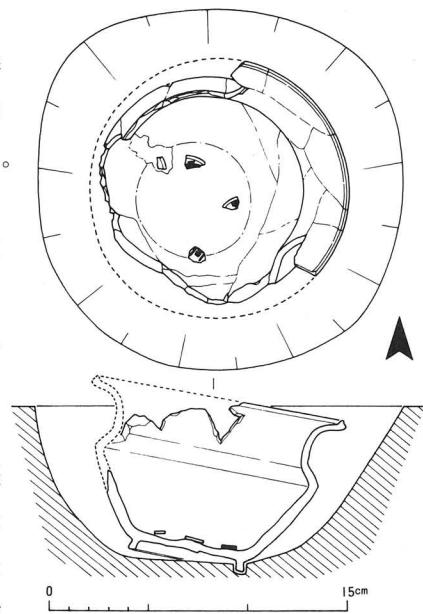


fig. 12 S X2982実測図

III 遺 物

1. 土 器 (fig.13~15、PL.11)

調査区南半の西と東で検出した2基の井戸S E 2988とS E 2965、南半中央部の3ヵ所の土壙S K 2966~2968、掘立柱建物S B 2975・2992の柱掘形、およびこれらの遺構を覆う遺物包含層から奈良時代の土師器・須恵器が、また調査区東半の土壙S K 2951~2955からは中世の土師器小皿や瓦質土器・陶器片が出土した。出土量はいずれも極くわずかである。

S E 2988出土土器 (fig.13)

井戸S E 2988は掘立柱塀S A 2960に重複し、掘形の切合の関係からS A 2960より新しい。出土土器は、少量の土師器と須恵器であり、形態・法量・手法からいざれも奈良時代後半

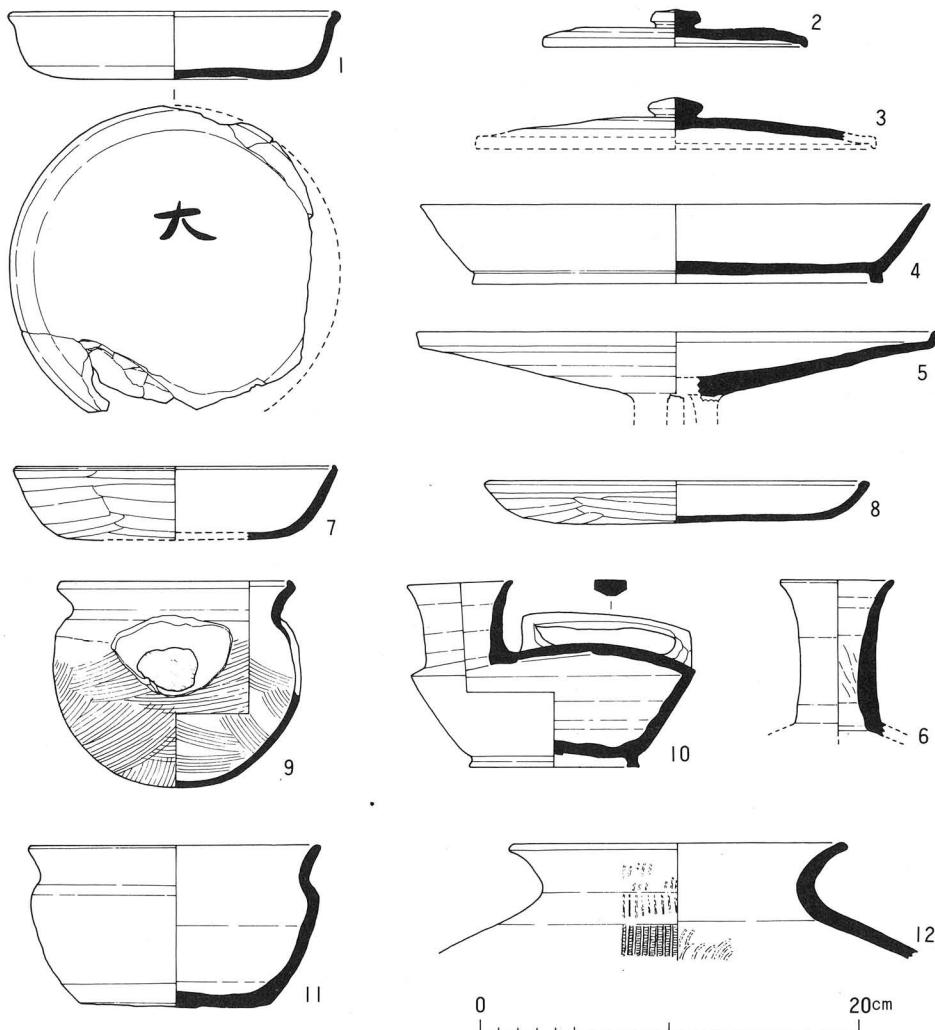


fig. 13 S E 2988(1~6)、S E 2965(7~10)、S K 2968(11~12)出土土器実測図

の平城宮III(750年頃)に相当する。

土師器 杯A・杯B・甕の体部破片がある。杯A II(1)は口径17.0cm、器高3.6cm。底部外面ナデ調整のa手法で、暗文・ヘラミガキはない。底部外面に「大」の墨書がある。

須恵器 杯A・杯B蓋・皿B・高杯・壺L・甕類の体部破片がある。杯B IV蓋(2)は口径13.8cm。頂部上面はヘラキリ後ロクロナデで仕上げる。杯B I蓋(3)は口縁部を欠く。頂部上面はヘラケズリ後ロクロナデで仕上げる。皿B(4)は口径26.8cm、器高4.2cm。底部外面ヘラケズリ。高杯(5)は杯部のみの破片で口径27.4cm。杯部下面をヘラケズリし、わずかに残る脚部上端に方形透し孔の痕跡を留める。類例から、本来3方向の透しをもつものと推定できる。壺L(6)は口頸部のみの破片。

S E 2965出土土器(fig.13)

井戸S E 2965は時期不明の土壙S K 2956と重複し、S K 2956より古い。出土土器は形態・法量・手法から奈良時代末期の平城宮V(780年頃)に相当する。

土師器 杯A・皿A・高杯・甕Aがある。杯A II(7)は口径16.8cm、器高3.9cm。底部と口縁部の外面全面をヘラケズリするC₀手法。皿A I(8)は口径19.8cm、器高2.3cm。同じくC₀手法によるもの。甕A(9)は口径12.1cm、器高10.9cm。体部内外面をハケメ調整し、口縁部をヨコナデして仕上げる。ハケメ調整の及ばない体部上端に成形時の粘土紐のツギ目と叩き成形の痕跡を留める。なお、体部側面に、焼成後に内側から敲打によってあけられた3×2cmの小孔がある。S E 2965出土土器中、完形を保つ唯一の土器であり、おそらくこの井戸の廃絶に伴う祭祀に用いられたものであろう。

須恵器 杯A・高杯・平瓶と壺・甕の体部破片がある。平瓶(10)は体部径15.1cm、器高9.9cm。ヘラケズリによって断面6角に面取りした提梁をもつ。底部外面はヘラキリのまま。

S K 2968出土土器(fig.13)

土壙S K 2968は掘立柱塙S A 2960に重複し、S A 2960より新しい。出土土器は極く少量で、土師器甕Aの小破片と須恵器皿B蓋・鉢・甕Aがある。鉢(11)は口径15.2cm、器高8.6cmで、底部外面はヘラキリのまま。甕A(12)は口径17.3cm。体部内外面と口縁部外面に叩き成形の跡を残す。皿B蓋は口径約28cmで、口縁端部で屈曲する奈良時代後半期(平城宮III以降)の特徴をもつ。

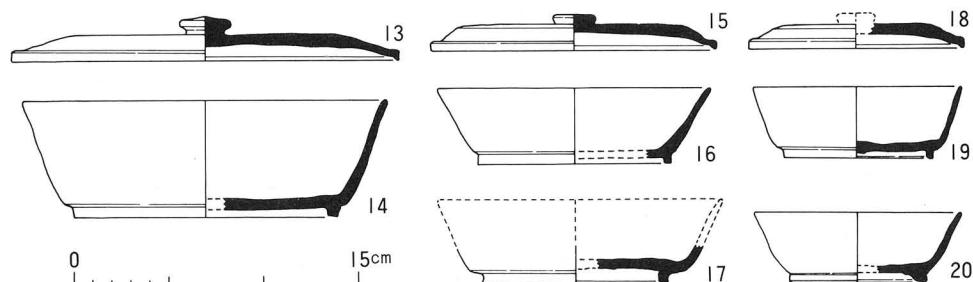


fig. 14 包含層出土土器実測図

包含層出土土器 (fig.14)

包含層の出土土器は、小破片のものが多く、本来の器形や製作技法を観察できる個体がほとんどみられない。ここでは比較的保存状態の良い須恵器杯類の中から、実測可能な個体を示した。各土器の出土位置は13・14・18～20が井戸 S E 2988のある調査区西南部、15・16が調査区中央北半の土壌 S K 2977の周辺、17が井戸 S E 2965西方である。これらの包含層出土土器は、底部外周よりやや内方に高台をもつ杯B III(17)を例外として、他の個体は、底部外周にほぼ接する位置にある断面方形の高台、端部付近で屈曲する蓋の口縁部形態に明らかなように、いずれも奈良時代後半期の特徴をもつものであり、形態・法量・手法から平城宮III(750年頃)に相当するものとみられる。杯B I蓋(13)は口径20.2cm。頂部上面はヘラケズリ後ロクロナデ。杯B III蓋(15)は口径15.0cm。頂部上面はヘラケズリ後ロクロナデ。杯B IV蓋(18)は口径11.2cm。頂部上面はヘラケズリ後ロクロナデで仕上げる。杯B I(14)は口径19.2cm、器高6.2cm。底部外面はヘラケズリ後ロクロナデ。杯B III(16)は口径14.3cm、器高4.0cm。杯B IV(19)は口径10.9cm、器高3.8cm。杯B IV(20)は口径10.8cm、器高3.7cm。底部外面はいずれもヘラキリのままである。

S X 2982出土土器 (fig.15)

調査区北端の掘立柱建物S B 2980に重複する位置にある小土壌から、中に和銅錢を納めた小形の須恵器壺Cが出土した。おそらく地鎮の目的で埋納したものであろう。S X 2982出土の壺C(21)は口径12.6cm、器高8.6cm。口縁部は円筒形の頸部から水平に近く急に外反して広がり、端部は上方に突出する。体部下半ヘラケズリ、底部外面はヘラキリのままで、断面方形の高台をつける。ほぼ同形態・同手法の壺C(22)が奈良市前川遺跡の井戸2^{註1}の出土土器にあり、平城宮III相当の土師器・須恵器を伴出している。奈良女子大学構内の左京二条六坊十一坪の土壌 S K 2847では三彩小壺・土馬とともに5個体の壺Cが出土した。^{註2}5例とも高台をもたず、底部はヘラキリあるいは糸切りのままであり、伴出の土馬の形態からも奈良時代末に近い時期のものと推定される。図示したその1例(23)は口径13.1cm、器高7.9cm。口縁端部は上方に突出し、底部外面はヘラキリのままである。S X 2982出土の壺Cは、形態・手法の特徴が前川遺跡出土例にはほぼ一致しており、年代的にも、ほぼ奈良時代後半の平城宮III(750年頃)に相当する時期のものと推定される。

註1. 『平城京朱雀大路発掘調査報告』 1974 奈良市

2. 『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報II』 1984 奈良女子大学

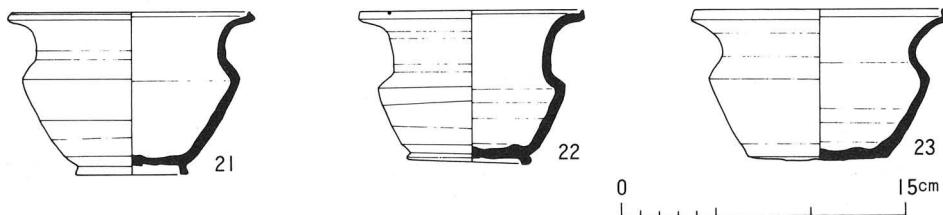


fig. 15 S X 2982・井戸2・S K 2847出土土器実測図

2. 瓦 塼 (fig.16)

軒丸瓦 2 点、軒平瓦 1 点、塼 6 点以上のはか、丸・平瓦が整理箱 1 枚出土した。軒瓦は無論のこと、丸・平瓦も極端に少ないことが注目されよう。

軒丸瓦 6133K と 6225A 型式で、どちらも欠損しているうえ磨滅がはなはだしく、特に前者のばあいには認定が困難なほどである。6133K は小型の中房に 1 + 5 の蓮子を配し、外区内縁に 27 個の珠紋を巡らした単弁 16 弁蓮華紋軒丸瓦である。13 種ある 6133 型式のうちでも K 種は弁端丸く、珠紋帯の内外に圈線のあるのが特徴。遺物包含層出土。6225A は大型の中房に 1 + 8 の蓮子を配し、外区外縁に 24 個の凸鋸歯紋を巡らした複弁 8 弁軒丸瓦で、内・外区の境を 2 重圈線とする。A は 6225 型式の他種と比べると、中房が大であり、また弁端尖り子葉高く、しかも内区の地が盛りあがっている。平城宮を代表する軒丸瓦の一つで、特に第二次大極殿 = 朝堂院地区からの出土が多い。S A 2960 の柱掘形から出土。

軒平瓦 6721F 型式と呼んでいる内区に 5 回反転均整唐草紋を配したもので、上外区に 33 個、下外区に 34 個の珠紋を置くが、脇区にはない。6721 型式の中心飾りは“小”字形をなし人間の目鼻に似るが、F 種では鼻にあたる中心葉の位置が低く、目にあたる左右葉がほぼ水平である。また珠紋も大振り(これは D 種と共通する)。6721 型式は、全般に平城宮においては大膳職地区・東院地区から多量に出土するが、F 種はまれでむしろ平城京域に多い。S A 2960 を切って掘り込まれた S K 2968 から出土。

平瓦 1 点は完形で、長さ 36.0cm、広端幅 26.5cm、狭端幅 23.5cm、弧深 4.6cm。凹面に布目痕と糸切り痕を残す。凸面は縦位繩叩き。井戸 S E 2965 出土。この他に凸面横位繩叩きのものが 1 例ある。

塼 大・小の 2 種類に分けられる。大は長さ 36.2cm・幅 31.6cm・厚さ 10.3cm(1 個)。小は長さ 29.4cm・幅 17.2cm で、厚さ 6.7cm のもの(4 個)と 5.0cm のもの(1 個)がある。すべて井戸 S E 2965 の井戸枠下端に据えて使用されていた。

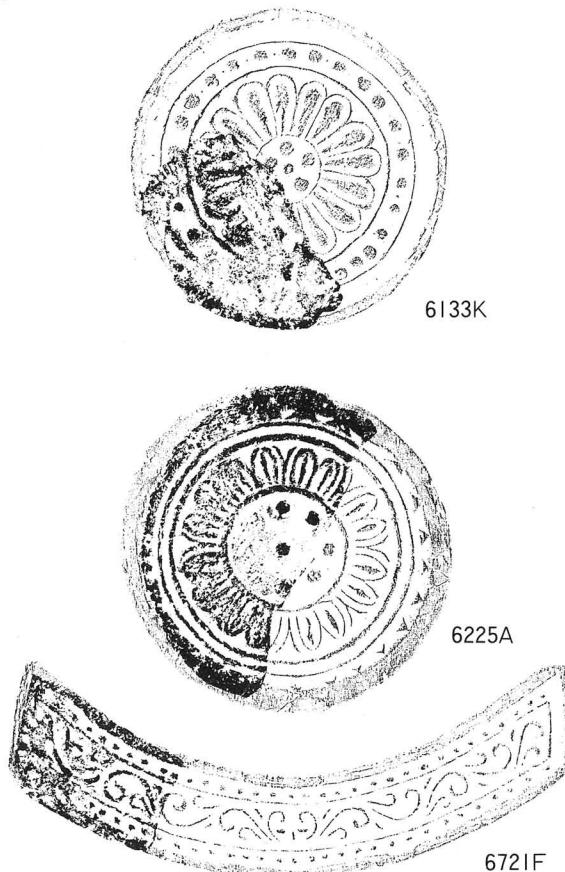


fig. 16 出土軒瓦拓影(1/4)

3. 錢貨・木製品 (fig.17、PL.10)

錢貨 小土壤 S X2982に埋納された須恵器壺の中には銅錢が納められていた。出土状態は fig.12 にみる通り細片化し壺内に散乱している。壺内に流入していた土ごと整理室へ持ち帰り、X線写真撮影を行った結果、壺の底面に付着した破片の他に流入土中にも細片が認められたため、水洗によってこれらを検出した。破片は総数14点を数える。破片の中には外周部が二重に錆着するものがあり、外周部片も1個体分を上回るところから、少なくとも2個体の存在を確認しうるが、全体に腐蝕が進み接合は不可能な状況にある。銭文は和・同・開・珍四文字のすべてを部分的に確認できる。開の字は門構の片側が遺存し、隸開の普通和同であることが判明するが、それ以上の細分型式は不明である。

曲物 1はS E2965出土の曲物底板。ヒノキの柾目材を使用。直径17.9cm、厚0.5~0.75cmで、現状では木理に沿って3片に割れ、全体の $\frac{1}{3}$ を欠失する。内外面は丁寧に削られて平滑となり、ほとんど削り痕をとどめない。周縁は鋭利な刃物で垂直に裁ち落とされ、側面に側板固定用の木釘穴が3孔認められる。有機物の沈着により内面は黒色を呈する。この底板とともに側板の細片が出土している。側板片は厚0.3cmの薄板で、内面に垂直方向と斜方向の刻み目(けびき)がみられるが、側板幅やとじ部分の仕口は不明である。

木蓋 2はS E2988出土の完形の木蓋で、曲物底板を再利用した製品である。直径14.2cm、厚0.45~0.6cm、ヒノキ柾目材を使用。表面は平滑な曲物底板当初の面を残すが、裏面は粗い割り面となる。表面周縁部には外形を整える際の目安となる円形の刻線が残り、この刻線に沿って周縁を垂直に削り落している。側面には曲物の側板を固定する木釘穴が5孔みられ、うち1孔には長さ1cmの木釘が残る。この曲物底板を転用するに際して、側面の木釘穴を結ぶように刻線を入れ、刻線を目安に上下から鋭利な刃物を入れて割り裂き、厚さを減じている。円板中央には径0.65×0.5cmの孔を割りぬき、ここに細棒を裏面から差しこんでツマミとする。現状では2片に割れ、表面に斜方向の刃物傷が残る。

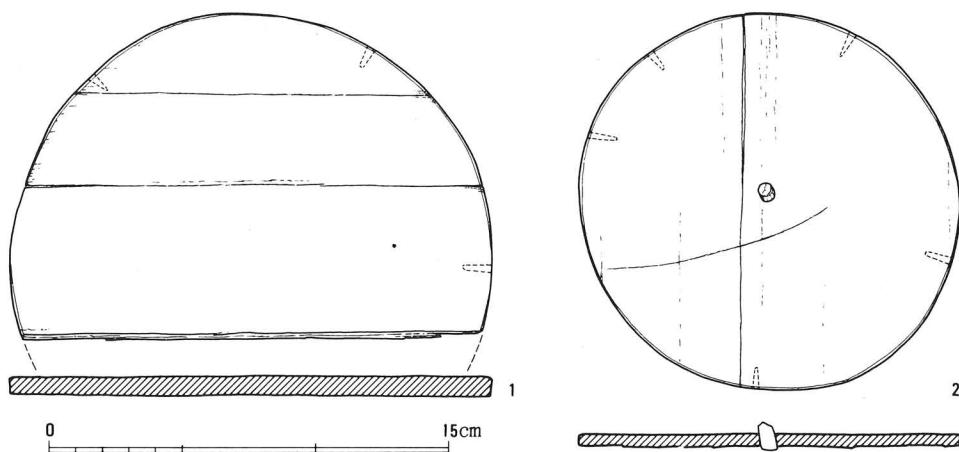


fig. 17 出土木製品実測図

4. 建築部材 (fig.18、PL. 9・10)

掘立柱建物・塀の柱根・礎板は九つの柱穴(ⓐ～⑩…fig. 8 参照)に遺存していた。

柱根ⓐⓑ 南北塀 S A 2985 の柱根。径は 23cm と 20cm。腐蝕が進んでいるが、当初から丸柱であったと考えられる。いずれも長さ 24 × 幅 9 × 厚さ 4 cm の薄板を礎板として用いる。ⓑ の底部は鋸で切断している。

柱根ⓒⓓ 東西塀 S A 2960 の柱。ⓒ の径は 19cm で、底面・側面ともに腐蝕が進む。礎板は用いない。ⓓ の径は 22cm、底面にチョウナの荒いハツリ痕が残り、側面にもわずかに面が残る。22 × 11 × 3 cm の礎板を置くが、礎板は沈下をおこして用をなしていない。

柱根ⓔ S B 2990 の東妻の棟通りの柱。掘形の底に 45 × 18 × 11cm と 35 × 18 × 11cm の厚板二枚を南北方向に置き、直上に 50 × 8.5 ~ 14.5 × 3.5cm の薄板 3 枚を東西方向に置く手のこんだ礎板を据え、その上に柱を立てる (fig. 9)。底部は腐蝕しているが側面に面がのこる、径 22cm のほぼ八角形の柱である。礎板のうち厚板の方はチョウナで調整した柾目板を年輪に沿って割った板で、もと一本の材であったものを鋸で挽いて二つに切断している。

柱根ⓕⓖⓗ いづれも S B 2990 の柱。断面八角形で径は各々 30、30、31cm。底面にもチョウナハツリ痕がある。ⓖ の底部には心墨が一本わずかに残る。ⓗ には心墨一本と、周囲に八角形の三辺分の墨、八角形の二頂点を結ぶ心墨と平行な墨と垂直な墨が各一本残る。心墨以外の墨は八角形の断面形を作図するための墨と思われる。他の柱根はすべて心持材であるが、ⓖのみは心去り材で、原木から二~三本の柱を製材することができたであろう。

柱穴ⓘの礎板 柱は抜き取られ礎板のみが残存する。礎板は 40 × 15 × 5 cm の板材で、木口一端に丸枘が半存し、他端は焼けこげている。また両側面はチョウナハツリ、一面は二次的なチョウナハツリ、一面は年輪方向にさいている。側面の穴は間渡し穴かと推定される。おそらく太枘をもつ八角形の材(例えば束)の廃材を利用したと思われる。なお以上の柱根・礎板の樹種はすべてヒノキである。

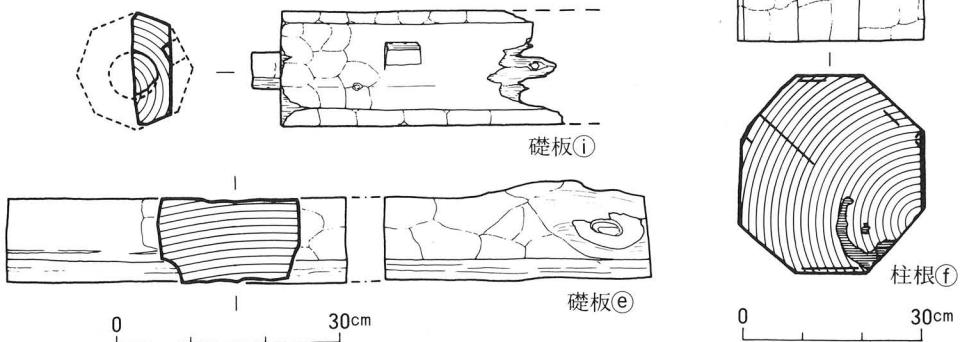


fig. 18 柱根・礎板実測図

IV 考 察

1. 条坊と遺構の占地

平城京左京三条二坊三坪は、西で東一坊大路、北で三条条間路に面し、東と南でそれぞれ六坪と四坪との坪境小路に面している。ここでは三坪をとり囲む条坊道路の位置を復原し、調査区が三坪で占める位置と検出遺構より、三坪の宅地割の状況を検討しよう。

三坪の南北幅は坪の計画寸法 450 尺から推定条間路幅 4 丈と、従来の所見による小路幅 2 丈の各 $\frac{1}{2}$ を減じた 420 尺で、東西幅は平城宮跡第39次調査で確認された東一坊大路幅 8 丈と小路幅 2 丈の各 $\frac{1}{2}$ を減じた 400 尺とみることができる。

条坊道路の想定を基に今回の調査区が三坪で占める位置を復原すると、坪の中央に接する南東部に位置し、南東部の北西寄り約 $\frac{1}{4}$ を占めることが判明する。三坪内の調査は、今回の調査区の北に接する地域で行った奈良市の調査(1983年) 面積を合せても 1,060 m² で、三坪全体(14,700 m²) の 7% にすぎない。したがって三坪の宅地割の全貌を明らかにすることはできないが、今回の調査成果から坪内の土地利用状況を想定してみよう。

検出遺構の中で区画の塙と考えられる南北塙 S A 2970 と東西塙 S A 2960 の交点の座標と、第39次調査の東一坊大路心の座標の東西方向の距離は国土方眼方位で 73.414 m となる。この値を朱雀大路で確認している条坊方位の振れ(N 0°15'41"W) で修正すると実長 70.563 m を得る。この値を平城京の基準尺(0.295~0.296)で除すと、240 尺に近似した値を得る。これは東二坊大路心と S A 2970 間の東西距離が 240 尺で、大路幅 $\frac{1}{2}$ (40 尺) を減ずると 200 尺となり、前述の三坪の東西幅の $\frac{1}{2}$ にあたる。すなわち S A 2970 が三坪の東西中軸線上に位置することになる。また同じ交点の座標と第39次調査の二条条間大路心の座標との南北方向の距離は国土方眼方位で 625.663 m で、この値を条坊方位の振れで修正すると実長 625.870 m を得る。同様に京の基準尺で除すると 2,118 尺に近似した値を得る。2,118 尺から二条条間路～三条条間路の条坊計画寸法 1,800 尺と三条条間路推定幅の $\frac{1}{2}$ (20 尺) を減ずると 298 尺の値となる。これは前述した三坪の南北巾 420 尺の $\frac{1}{2}$ (210 尺) すなわち南北方向の坪心より 88 尺南に東西塙 S A 2960 が位置することになる。南北塙 S A 2970 は柱間 8 尺であるから、坪心に柱が位置し南へ 11 間目(8 尺 × 11) に東西塙 S A 2960 が配置されることになる。

南北塙 S A 2970 は北側の奈良市の調査で、坪心より 40 尺(8 尺 × 5 間) の位置に北端となる可能性のある柱掘形が確認されており、また S A 2960 の南で、西へ 5 尺移動して南へ同じ柱間で延長している。東西塙 S A 2960 は南北塙との交点すなわち坪心線より 7.5 尺の柱間で西に 5 間以上、東に 13 間以上延長していることが確認されている。また両塙と同時期の建物 S B 2990 は、坪心より西へ 20 尺の位置に東側柱を、南へ 20 尺の位置に北側柱をそろえて計画されており、S B 2950 も S B 2990 と柱通りをそろえていることが確認された。

これらの遺構の配置から三坪の占地を考えてみると、南北塙 S A 2970 は坪の中心を通る

が、塙の両側にある建物配置によると、三坪を東西に宅地割する塙ではなく、宅地内での区画用の塙と考えられる。これはB期の建物S B2980が坪心をまたいで建てられていることより、B期においても東西を二等分する区画はないものと思われる。また南北方向の宅地割区画についても南北塙が北へ延長することやS A2985がS A2970と柱間をそろえて南へ延長することにより $\frac{1}{2}$ 町・ $\frac{1}{4}$ 町の区画割りは存在しなかったものと考えられる。

三坪内での調査面積がまだわずかであり、今後の調査の進展によって解明されると思われるが、平城宮に近接していること、また同じ三条二坊内の調査で東に隣接する六坪で1町またはそれ以上、九坪でも1町かそれ以上、十五坪では1町から東西 $\frac{1}{2}$ 町と宅地が広域を占めていることより、今回検出の遺構配置を考えると、三坪でも宅地が1町を占める可能性が高い。

	X	Y	
二条条間大路心	-145,751.977	-18,027.326	平城宮第39次調査
東一坊大路心	-145,757.263	-18,054.064	"
S A2970とS A2960の交点	-146,377.640	-17,980.650	今回の実測値

tab. 3 条坊関係の計測座標値

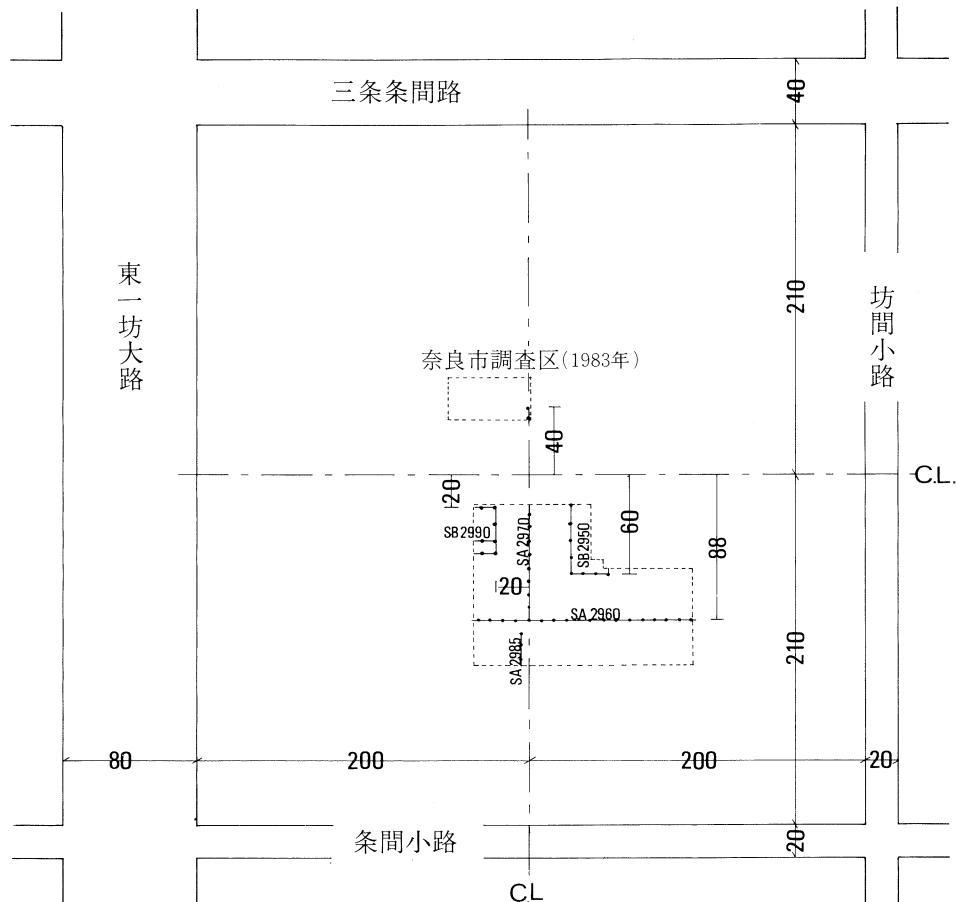


fig. 19 三坪の占地概念図 (単位 天平尺)

2. 遺構の時期区分

前節における検討の結果から明らかなように、今回の調査区は3坪の中央東南部、三坪を南北に二分する線の南側に位置し、三坪全体の約 $\frac{1}{6}$ の面積を占める。坪全体からすると極めて限られた範囲の調査であるが、調査区の西半部を中心に掘立柱建物・塙・井戸・土壙など多数の遺構を検出することができた。これらの遺構と出土遺物を手掛りに、三坪内における宅地の利用状況とその時期的な変遷を検討してみたい。検出した遺構は、遺構相互の重複関係、配置、出土遺物から、以下に述べるA～Eの5期に区分することができる。

A期 掘立柱建物S B2998と土壙S K2996がある。S B2998は柱掘形の一部を検出したのみで、規模不明の建物であるが、S B2980・2950と重複し、このいずれよりも古い。S K2996もS B2980に重複し、S B2980より古い。S K2996は既に述べたように、本来井戸の掘形として掘られたが、何らかの理由で計画を変更し、そのまま埋められたものである。S B2998・S K2996ともに出土遺物は皆無であり、造営時期については手掛りを欠く。

B期 東西棟建物S B2980のみ。坪内を区画する施設はみられない。S B2980はS B2950・S A2970と重複し、このいずれよりも古い。柱掘形・抜取穴とも出土遺物は皆無である。

C期 C期は調査区内で、三坪内部における整然とした建物配置が確認できる時期である。南北棟建物S B2950、東西棟建物S B2990、東西塙S A2960、南北塙S A2970・2985および井戸S E2988がある。S B2950・S A2970はB期の建物S B2980に重複し、柱掘形の切合関係からS B2980より新しい。なお井戸S E2988の掘形はS A2960の柱掘形に一部重複するが、この点については造営における時間差とみることができよう。

遺構の配置関係をみると、まず坪内を東西に二分する位置に南北塙S A2970を、南北二分線(調査区外)の南26.9m(88尺)の位置に東西塙S A2960を置き、また塙S A2970の柱列より西へ1.5m(5尺)寄せた位置に、塙S A2960の南2.4m(8尺)の位置から南へ延びる南北塙S A2985を置いて、三坪南半部を四区画に分割する。東西塙S A2960は坪内南北四分線の北4.5m(15尺)に位置することになる。東北区画内部に南北棟建物S B2950が、西北区画には南廂をもつ東西棟建物S B2990が、東西に柱筋をそろえて建てられる。S A2970とS B2950西側柱列の間は7.1m(24尺)でS B2950の梁間総長に一致する。またS A2970とS B2990の東妻柱列の間は5.9m(20尺)であり、区画施設としてのS A2970とその東西の区画内に建てられた2棟の建物配置に一連の計画性が認められる。なお今回の調査区内では、南北塙S A2985で区画された西南、東南区画内には建物遺構は検出されなかった。

さて、以上に述べたような配置計画が認められるとすると、三坪内の南半部を区画するS A2970以下の掘立柱塙は、その性格として坪内の宅地割りの用途をもつものではなく、同一宅地内部の区画施設とみることができよう。調査範囲が狭いため確言はできないが、平城京内の類例から想定するなら、このC期の建物配置を一坪占地の一形態として、東北

区画を、S B 2950を西脇殿とし、東方に南北棟の東脇殿、その中間北方に東西棟の正殿を置く主要区画とし、東南区画をその前面に位置する広場、S B 2990・S E 2988の位置する西北区画を東北区画とは少しく性格を異なる生活空間とみることも可能であろう。

C期遺構の出土遺物には、塙S A 2960の柱掘形から出土した平城宮(軒瓦)II期の軒丸瓦6225型式がある。下限は井戸S E 2988出土土器から天平末年(750)頃と推定される。包含層出土土器のほとんどがこの天平末年頃のものであることは、C期の廃絶に伴う土器類の廃棄量がかなり多量であったことを示すものであろう。

D期 南北棟建物S B 2992・土壙S K 2968及び井戸S E 2965がある。S B 2992はC期の南北塙S A 2970に重複し、S A 2970より新しい。西南隅の柱掘形から、奈良時代後半期の須恵器杯B蓋とともに、C期の建物S B 2990の柱抜取穴出土品と同一個体とみられる須恵器壺の頸部破片が出土している。S K 2968もC期の東西塙S A 2960の柱掘形に重複し、S A 2960より新しい。埋土から平城宮(軒瓦)III期の軒平瓦6721型式が出土した。S B 2978東辺の地鎮遺構S X 2982はこのD期の造営に伴うものと考えられる。D期以降は建物規模の縮小が顕著であり、坪内部を区画する施設も不明である。

E期 南北棟建物S B 2975・2978および井戸S E 2965がある。東西塙S A 2962・建物S B 2995についてD・E期いずれとも決めがたい。S B 2975・2978の2棟は互いに棟通りをそろえて建てられている。出土遺物としては、S B 2975の柱掘形から少量の土器が出土しているが、小破片であり、時期を決定できるものはない。E期の下限は、井戸S E 2965の出土土器から奈良時代末頃と推定される。

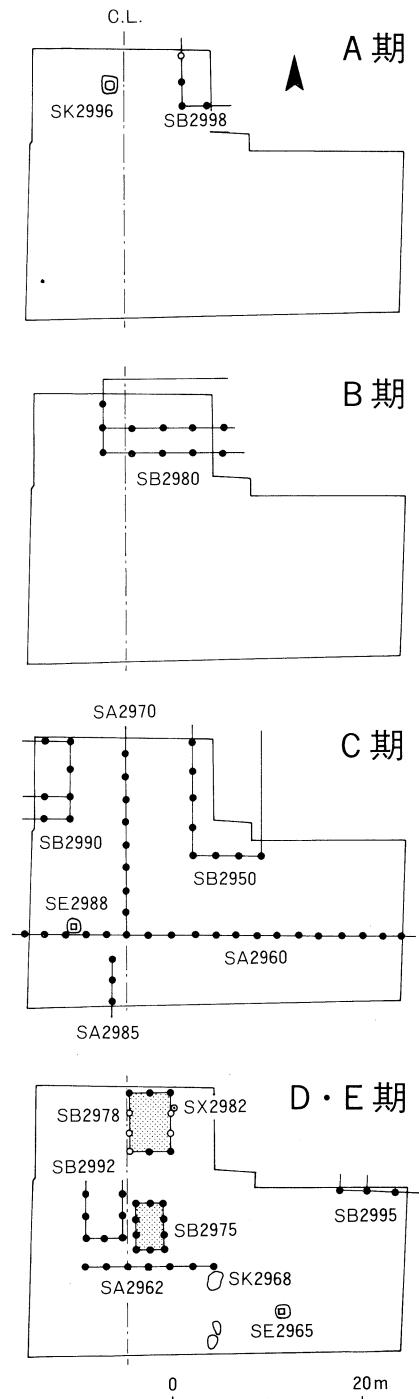


fig. 20 遺構の時期変遷図

3. 京内の宅地割と坪内区画施設

今回の調査では、平城京左京三条二坊三坪内の宅地割について次の点が明らかとなった。奈良時代前半のB期には三坪の東西中心線をまたぐ建物(SB2980)が存在し、一町を占める宅地割が想定できること。つづく奈良時代中頃のC期にも一町を占める宅地割が推定でき、宅地内が坪の東西中心線にのる南北堀(SA2970)やそれと直交する東西堀(SA2960)によって区画され、その各区に整然と建物群が配置されていることなどである。こうした一町規模の宅地をもち、その坪内を掘立柱堀によって区画するという状況は、これまで調査された左京三条二坊の六坪宮跡庭園や十五坪の貴族の邸宅と同じ様相である。

そこで、平城京内における坪内区画施設と宅地割との関係について考察を進めてみよう。条坊の坪内を区割する施設には、(1)坪を分割する宅地割にかかる宅地割施設、(2)一つの宅地内を区画する宅地内区画施設の二つの性格が考えられる。この二つは(1)が宅地班給と結びつくいわば公的な面をもつ一方、(2)は宅地班給後の私的な施設であるという意味でも機能の差があり、坪内を区画する遺構は両者を区別してその性格を検討する必要があろう。

平城京内の発掘調査によってこれまで知られた宅地割の例と坪内区画施設の例をまとめると、tab. 4 のようになる。これをみると、坪内区画施設には①坪内小路、⑤溝、⑦掘立柱堀の三種の遺構が検出されている。これ以外に、特殊な例として④堀河によって坪が2分される場合があり、また遺構の検出しにくい、⑥簡易な木柵様の施設も想定される。ここで(1)宅地割と(2)宅地内区画という性格の面とこれら諸遺構のあり方を合せ考えてみると、これまでのところ(1)宅地割施設には①坪内小路や⑤溝が、(2)宅地内区画施設としては⑦掘立柱堀がみられるという傾向が認められる。この傾向が一般化できるかどうかは、まだ京内の調査事例が少いためさらに今後の調査が待たれるが、傾向として指摘しておきたい。

条坊位置	時代	宅地割	宅地割施設	宅地内区画施設	文献
左京	一条三坊十五・十六坪	奈良初期	2町		『平城宮発掘調査報告VI』1975
	二条三坊十三坪	奈良後半	南北½町か	坪内小路	『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1982
	三条一坊十四坪		2町か		『奈良国立文化財研究所年報1968』
	三条二坊三坪	奈良前～中	1町（以上）		堀（東西2分） 本報告
	三条二坊六坪	奈良時代	1町（以上）		『平城宮左京三条二坊六坪発掘調査概報』1976～1980
	三条二坊九坪	奈良後半	1町（以上）		『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和54年度』1981
右京	三条二坊十五坪	～8世紀末 8世紀末～	1町 東西½町		『平城宮左京三条二坊』1975
	三条四坊七坪	奈良初～後 奈良末期	南北½町 1町	坪内小路	『平城宮左京三条四坊七坪発掘調査概報』1980
	四条四坊九坪	奈良前半 奈良中頃	南北½町か½町 東西½町以上	溝	『平城宮左京四条四坊九坪発掘調査報告』1983
	五条一坊四坪		½町	溝→堀	『昭和49年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1975
	五条二坊二坪	奈良第2期		堀（南北4分）	『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和57年度』1983
	五条二坊十四坪	～天平末年 ～延暦3年	南北½町、北½町 1町	溝	『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和54年度』1981
	八条三坊九坪	I期 II期～	東半南北½町ないし½町	堀河：細溝 堀河：細溝	『平城宮左京八条三坊発掘調査概報』1976
	八条三坊十坪	I期 II期～	東半東西½町か 東西½町	堀河：？ 堀河：細溝	同上
	二条二坊十六坪	奈良前半 奈良後半	南北½町（以下） 南北½町（以下）	坪内小路 坪内小路	『平城宮右京二条二坊十六坪発掘調査概報』1982
	五条四坊三坪	奈良前半	½町以下		『平城宮右京五条四坊三坪発掘調査概報』1977
	八条二坊十二坪	730～750～	南北½町ないし½町	堀	『平城宮西市跡』1982

tab. 4 平城京内の宅地割と坪内区画施設

4. 平城京における地鎮

建物の造営に先立ち、地の神を鎮め祭るために行う地鎮供養は、今日も一般的にみられる重要な造営儀式の一つである。この地鎮供養は『日本書紀』によると藤原宮造営時には既に行われており、平城宮の造営に際しても「鎮_{シテ}祭平城宮地」と『続日本紀』にあるところから、宮の造営に先行して宮地を鎮め祭ることが8世紀には制度化していたものと考えられる。宮地の地鎮供養に関しては未だその具体的な内容は明らかではないが、平城京内からは近年の調査の進展により、地鎮供養に伴う鎮物埋納品と推定される遺物が何例か発見されており、こうした造営儀式が寺院や宮殿のみならず平城京内に広範に浸透していたことを物語っている。こうした平城京の鎮物埋納例をまとめるとtab.5のようになる。

鎮物埋納例は今回の調査例を含め現在までに5例を確認できるが、1・2・4のように^註掘立柱建物の柱穴に埋納する例が多い点が注目される。埋納位置は身舎の四隅に限られるものの、特に一定の方角には定まっていない。また、鎮物が埋納された建物は、1のSB970が桁行5間、梁間4間の南北両面廂付東西棟で9世紀前半代における十五坪の主屋であり、4のSB2390が桁行6間、梁間3間の東・南二面廂付南北棟で九坪における脇殿的性格の建物であり、ともに宅地内の主要建物に限定されるようである。1では柱穴内におかれた礎板下面に銭が付着した状況で出土し、4では柱の周囲を礎と瓦片で固定した根巻状施設の下から銭が出土しており、柱穴を穿ち柱を立てる際に埋納された立柱祭に伴う鎮物である可能性が高い。これに対して5の今回の出土例は、上記の例とは以下の2点で大きく異なっている。第一に土器を容器としてその中に鎮物を納める点、第二に埋納物が特定の建物と直接結びつかない点であり、平城京内では従来知られていなかった鎮物埋納のパターンである。今回の出土例に近似するものとしては、1983年に法隆寺の旧南門前から発見された埋納物が想起される。これは径1.2mの円形土壙内に埋納された土師器碗の中に2枚以上の和同開珎と金箔が納められていたもので、西院伽藍完成時に行われた地鎮め供養(後鎮祭)に伴う埋納物と考えられている。今回の出土例も供養の対象が建物と結びつかない点や三坪のほぼ中央に掘られた土壙内に埋納されている点などを考慮すると、建物造営に先立ち、もしくは建物竣工後に行う地鎮め供養に伴う鎮物埋納とみるべきで、平城京内で確認された唯一確実な地鎮祭の資料として高い価値を有しているといえよう。

^{アナ} 註『延喜式』(践祚大嘗祭式大嘗宮条)には大嘗宮の造営にあたり「始掘_{シテ}殿四隅柱壇」とあり、四隅の柱穴を決定しその柱穴から掘り始めるのが掘立柱建物通有の工法と考えられる。

条坊位置	調査年	埋 納 物	埋 納 位 置	時 期
1 左京三条二坊十五坪	1974	和同開珎1	SB970 身舎西北隅柱穴	9C前半
2 左京四条三坊一坪	1977	水晶玉 1	SB07 身舎西南隅柱穴	奈良時代
3 右京二条二坊十六坪	1981	和同開珎4以上	SB545 南廂部分	奈良時代初頭
4 左京四条四坊九坪	1982	和同開珎1	SB2390身舎東北隅柱穴	奈良時代後半
5 左京三条二坊三坪	1983	須恵器壺内に和同開珎2	三坪のほぼ中央(SX2982)	奈良時代後半

tab.5 平城京における鎮物埋納例

5. 結語

今回の発掘調査地は、平城宮に近接する平城京左京三条二坊三坪に位置し、坪の中心よりやや南東寄りにあたる。東接する左京三条二坊六坪には特別史跡宮跡庭園が存在するなど、これまでの発掘調査によって平城京内でも高級住宅街であったこの地域の様相が明らかになってきている。調査面積は 940 m²で三坪全体の $\frac{1}{16}$ 程であるが、坪内の状況を知る上で貴重な資料を得ることができた。その成果は前節までに述べてきたが、以下調査成果のまとめを行い結語とする。

三坪の地は奈良時代を通じて宅地として継続して利用されていた。遺構は重複関係や配置状況、出土遺物によって A～E の五時期にわたる変遷が認められた。A 期（奈良時代前半）には調査区内には顕著な遺構はみられないが、B 期（奈良時代前半）には三坪の東西二等分線をまたぐ東西棟建物（S B2980）があり、三坪が 1 町を占める宅地であることが想定できる。C 期（奈良時代中頃）は調査区の遺構群が最も整った時期で、1 町規模の宅地内が掘立柱塀（S A2970・S A2960・S A2985）によって区画され、その各区に主要殿舎群が整然と配置されていた。このうち南北塀 S A2970 は三坪の東西 2 等分線上にのっているが、宅地割施設ではなく宅地内区画施設である。宅地内区画の東北区で確認した大規模な掘立柱南北棟建物 S B2950 は「匁」字配置をとる殿舎群の西脇殿にあたる可能性がある。また西北区の南廂をもつ東西棟建物も、大規模な柱根からみてこの区の主要殿舎であったと考えられる。B・C 期の遺構配置と 1 町規模の宅地占地というあり方から、この時期三坪は高級官人の邸宅であった可能性が強い。つづく D・E 期（奈良時代後半）には建物の数が減少し、またかなり小規模化して三坪の利用状況に変化がみられる。建物以外では S A2960 の後身にあたる東西塀（S A2962）や井戸 1 基のみがこの時期の主要な遺構である。以上のように三坪の宅地利用状況を明らかにでき、従来平城京内でも最も調査の進んでいた左京三条二坊の様相をより具体化できたことは、今回の調査の大きな成果といえよう。

出土遺物の中では、和同開珎を中心に納めた須恵器小壺が埋置された施設 S X2982 が注目されよう。これは地鎮の遺構と考えられ、平城京において地鎮供養が行われたことを示す貴重な例である。

以上、今回の調査では平城京左京三条二坊三坪の宅地利用状況を把握すると同時に、奈良時代前半～中頃を中心に同坪が 1 町規模の宅地をもつ高位の居住者の邸宅であったことを明らかにした。しかし、居住者を推定する手掛りは得られず、文献史料の上で左京三条二坊を本貫とすることが知られる從八位上樋本連大食（正倉院文書天平14年〔742〕11月23日優婆塞貢進解〔大日本古文書2卷319頁〕）などとの関係も不詳である。この問題をふくめ、今後の調査の進展によって左京三条二坊の往時の姿がさらに具体的に復原できるものと考える。

図 版

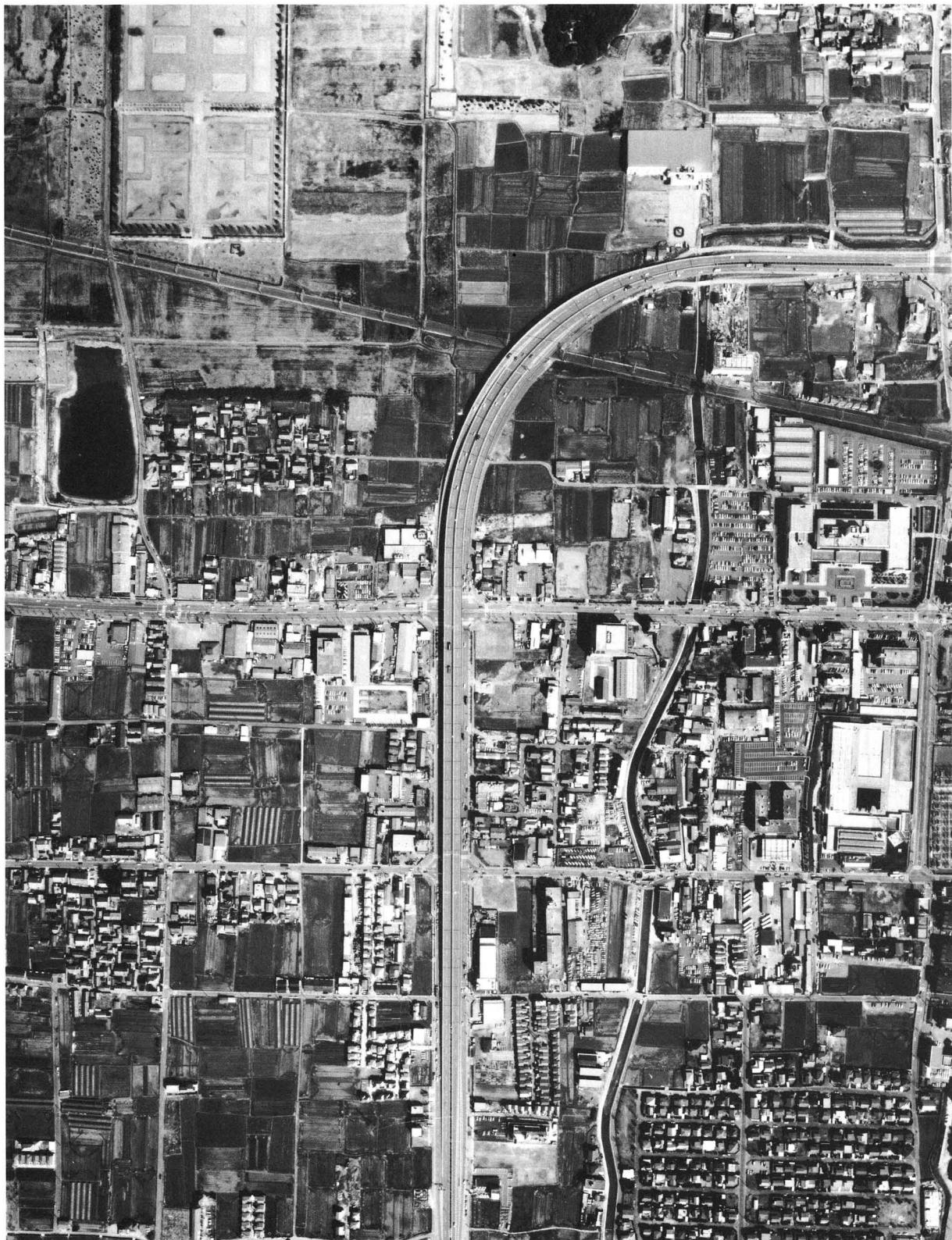


PL. 1 調査地周辺空中写真



(1962年撮影 1/6,500)

PL. 2 調査地周辺空中写真



(1984年撮影 1/6,500)

PL. 3 調査区全景



南から



南西から

PL. 4 調査区全景



西から



東から

PL. 5 調査区西半部の遺構・建物



調査区西半部の遺構(南から)



S B2950(南から)



S B 2980(南から)



S B 2990(東から)

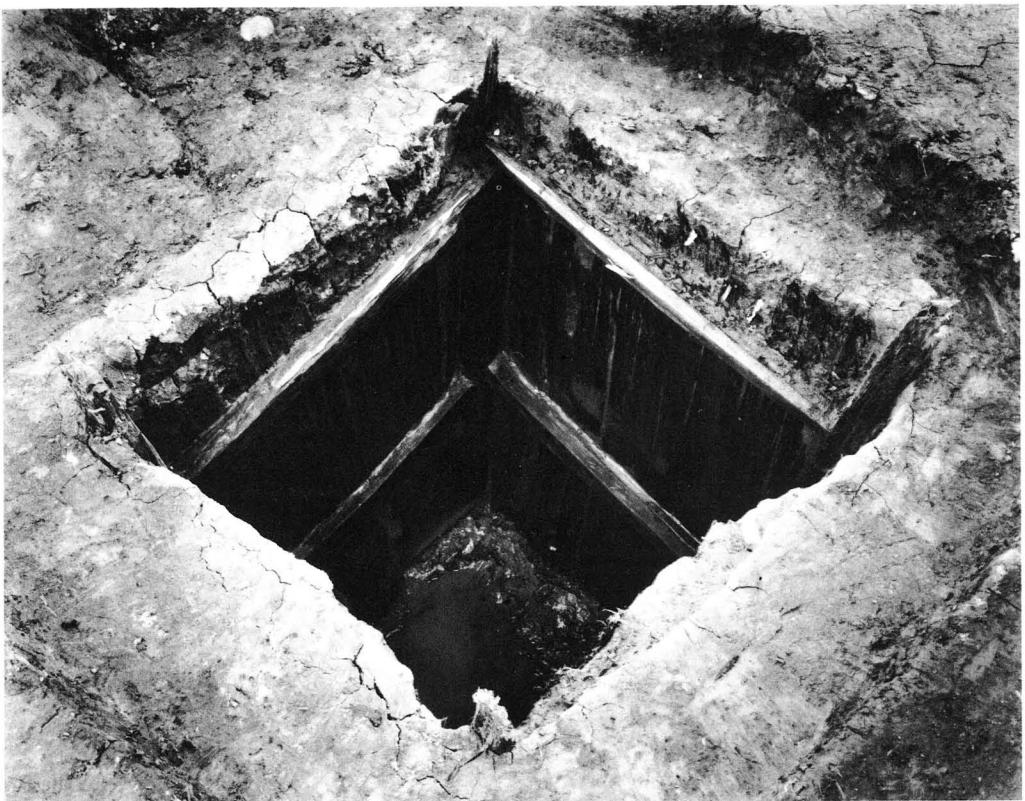
PL. 7 塚



S A 2960(西から)



S A 2985 · S A 2970(南から)



S E 2965 (北西から)

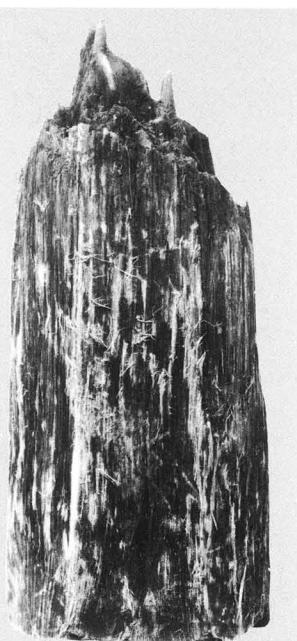


S E 2988 (北から)

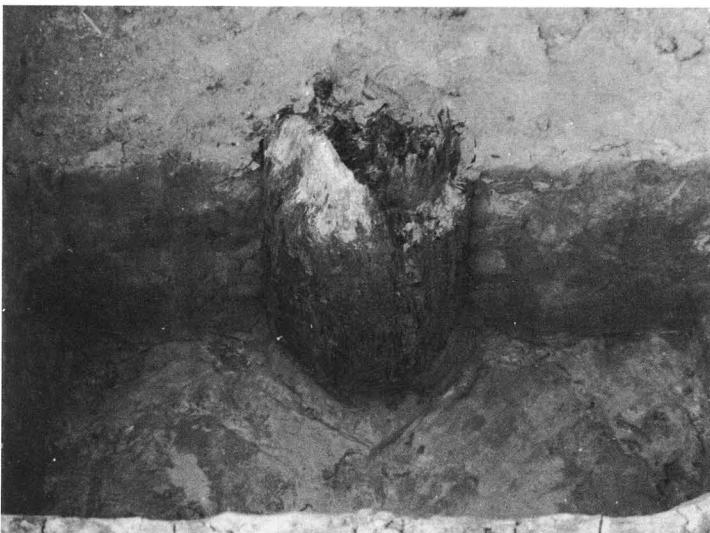
PL. 9 柱根



S B 2990柱根⑤



S B 2990柱根 ⑧



S B 2990柱根⑥



柱根⑨



S B 2990柱根⑩

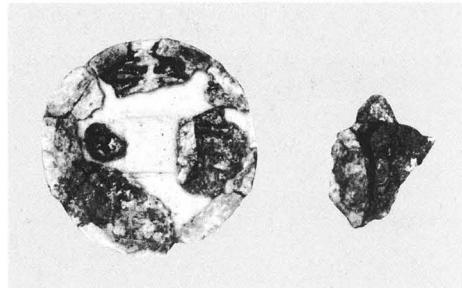


柱根⑩底面

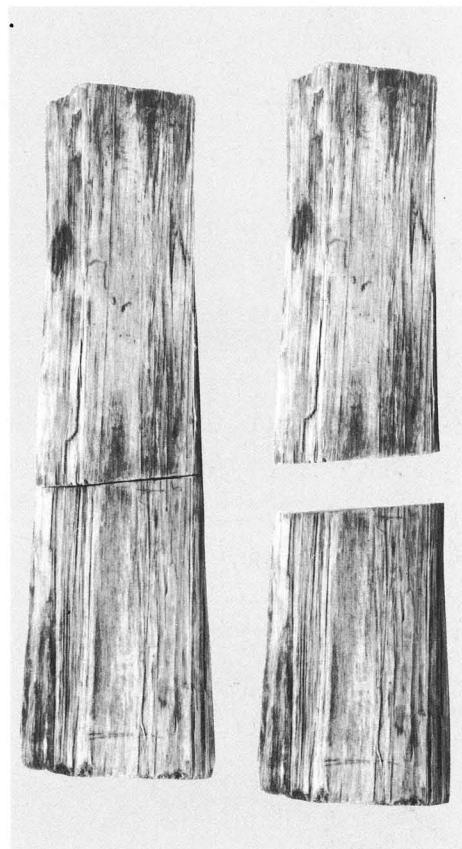
PL.10 地鎮壺・建築部材・木製品



地鎮壺出土状況(S X 2982)

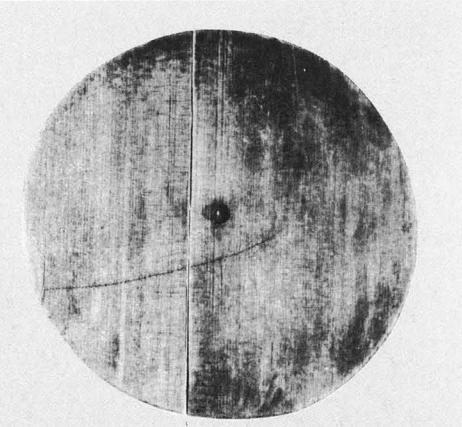
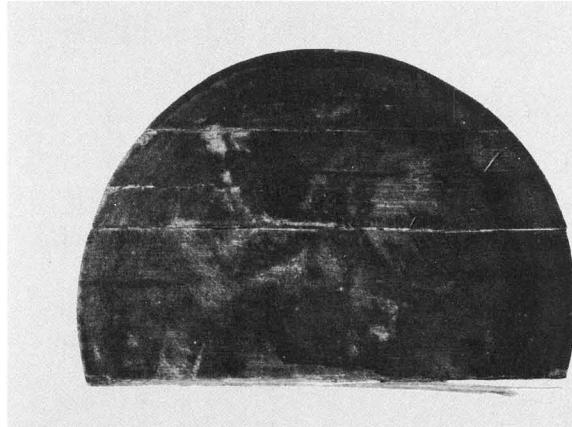


地鎮壺内の和同開珎



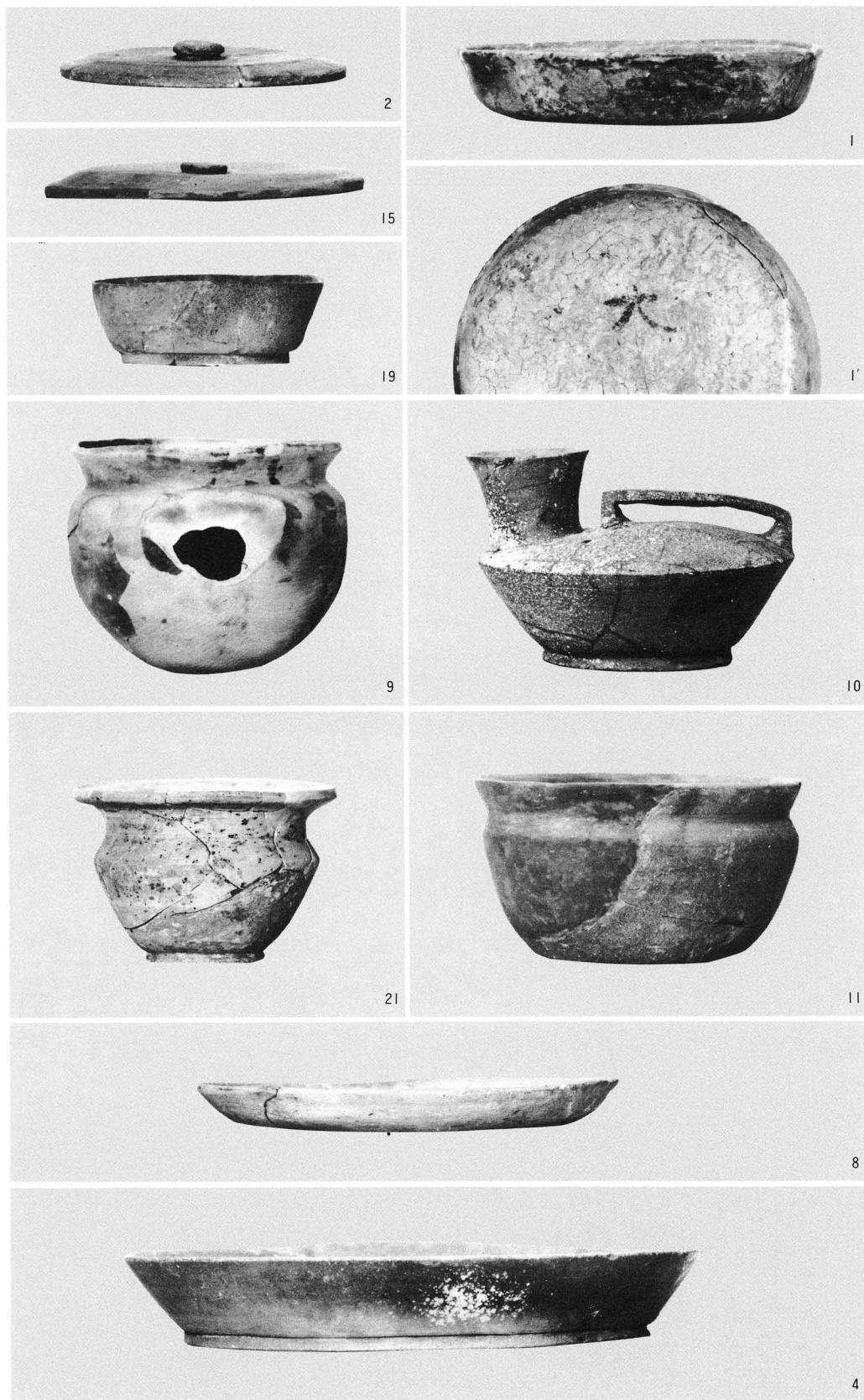
建築部材(柱穴①)

建築部材(柱穴②)



曲物・木蓋

PL.11 土器

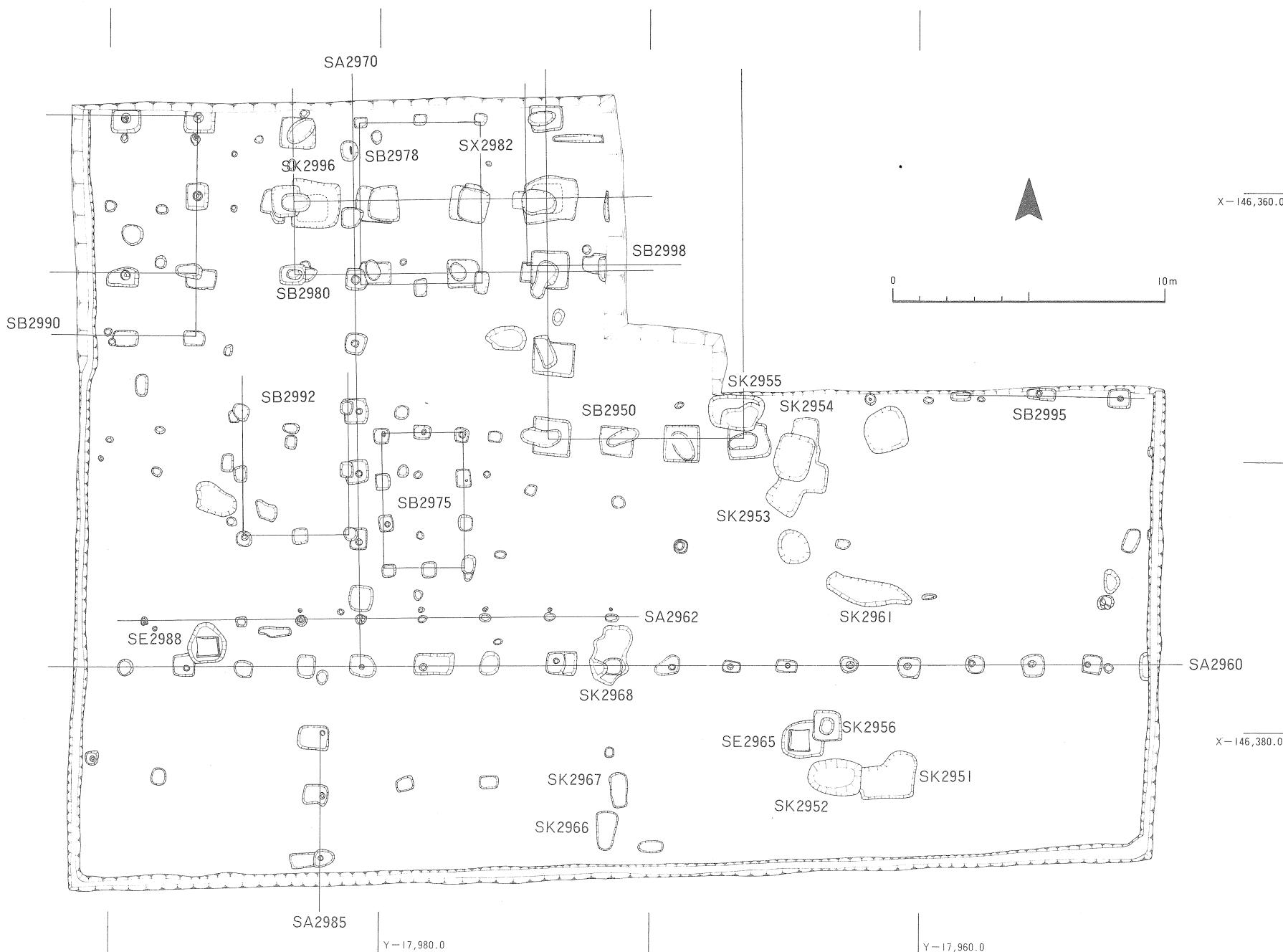


1 · 2 · 4 - S E2988, 8 ~ 10 - S E2965, 21 - S X2982(1/3)

平城京左京三条二坊三坪遺構空中写真(1/200)



平城京左京三条二坊三坪遺構実測図(1/200)



平城京左京三条二坊三坪発掘調査報告

1984年6月10日 印刷

1984年6月15日 発行

編集発行 奈良国立文化財研究所
奈良市二条町2丁目9番1号
TEL0742-34-3931(代)

印 刷 関 西 プ ロ セ ス
京都市右京区山ノ内山ノ下町13

